

北陸自動車道関連遺跡
発掘調査報告書
II

1976

滋賀県教育委員会
財団法人 滋賀県文化財保護協会

北陸自動車道関連遺跡
発掘調査報告書
II

1976

滋賀県教育委員会

財団
法人 滋賀県文化財保護協会

210.2
M
61

序

滋賀県教育委員会では、北陸自動車道の建設に先き立って、埋蔵文化財の発掘調査を昭和48年度より実施している。今日までその結果の一部については、すでに報告したところであるが、このたび、昭和49年度に実施した東浅井郡湖北町四郷崎遺跡、丁野遺跡の発掘調査の結果を報告するはこびになった。四郷崎遺跡は湖北地方における最古式の横穴式石室を持つ古墳であり、丁野遺跡は弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての墓地遺跡であって、湖北地方の古代史に新たな資料を提示することになった。これら遺跡の調査報告書がここに上梓されたことで、湖北地方の古代史解明に役立てば幸いである。

最後に、発掘調査および整理業務等に日夜努力いただいた調査員の方々ならびに地元関係者に深謝します。

昭和51年3月

滋賀県教育委員会

教育長 柳原太郎

例　　言

- 本書は、昭和49年度において滋賀県が日本道路公団金沢建設局からの委託を受けて実施した北陸自動車道関連遺跡の発掘調査報告である。
- この調査は、滋賀県が財団法人滋賀県文化財保護協会（理事長 和田純一）に再委託したものであり、これについては滋賀県教育委員会事務局文化財保護課技師中谷雅治、丸山竜平、田中勝弘が担当し、指導した。
- 調査および整理業務参加者は次のとおりである。

滋賀県教育委員会 技師 中谷 雅治
（現京都府教育委員会）

同 丸山 竜平

同 田 中勝 弘

財団法人 滋賀県文化財保護協会 技師 鬼柳 彰

主任調査員 別所 健二

調査員 谷口 義介・大橋 信弥
（現滋賀県教育委員会）

調査補助員 林 純・阪口 勝彦

川上 真成（以上京都産業大学）

榎木 充（京都学園大学）

古橋 修

事務担当 井上 隆・桑原 栄子・鈴木美佐枝

越久 栄美・北川 修

- 本書報文は田中勝弘、鬼柳 彰、別所健二、谷口義介がそれぞれ分担執筆し、文末にその文責を明示した。
- 特に丁野遺跡については、発掘面積の拡大等により、調査期間が昭和50年3月まで延期された関係上、昭和50年度に報告書を刊行するものである。

目 次

序

緒 言.....	1
第1章 位置と環境	2
第2章 四郷崎古墳	9
1. 調査経過	9
2. 遺 構	9
3. 遺 物	16
4. 結 語	29
第3章 丁野遺跡.....	32
1. 調査経過	32
2. 遺 構	34
3. 遺 物	43
4. 考 察	49

挿 図 目 次

図1 調査遺跡位置図及び周辺古墳分布図	2
2 丁野山古砦図	3
3 四郷崎古墳地形測量図	10
4 " 発掘後地形測量図	11
5 " 墳丘断面実測図	12
6 " 石室実測図	14
7 " 石室床面実測図及び遺物出土状態実測図	15
8 " 出土遺物実測図 (1).....	17
9 " " (2).....	18
10 " " (3).....	19
11 " " (4).....	20

緒 言

北陸自動車道建設に伴なう各種遺跡の調査は十数箇所を数えるが、昭和49年度は東浅井郡湖北町に所在する丁野遺跡及び四郷崎遺跡について発掘調査が実施された。

丁野遺跡は当初、道路予定地にかかる円墳の調査を目的としていたが、同円墳以南の丘陵端部より、方形台状墓と推定される遺構を中心とする土塙墓群が発見された。これは弥生時代末より古墳時代初期にわたる集団墓地遺構であり、湖北地方では、その例をみず、また滋賀県においても大津市南滋賀遺跡に次ぐものである。調査に当っては当初、全く予想しなかった性格をもつ遺跡であったため、遺構の検出は困難を極めた。

四郷崎古墳については、その所在は古くから知られていたが、墳頂部が大きく窪み、大規模な盗掘にあったものと考えられていた。しかし上部を除いて石室は良好な状態で遺存し、遺物も須恵器約50点、その他鐵鏃、刀子、管玉、また被葬者の遺体と思われる人骨が発見された。

調査は49年秋まで終了の予定であったが上述の如く、遺構、遺物共に予想をはるかに上まわり、さらに、近年にない積雪があったため現場作業は50年冬季まで費した。

なお調査に当っては現場作業員として次の方面に御協力をいただいた。

(丁野遺跡) 挂川 丹、今井 修、佐藤哲郎、中川 恵、西川雅徳、佐野善一郎、佐野新一、佐野良子、佐藤よしえ、今井寿賀子、佐野友子。

(四郷崎遺跡) 下村弓弦、松井喜代子、佐藤根都子、西島美代子、速水藤尾、速水とく代、片桐八重、村中たつ子。

また、調査期間を通して、湖北町教育委員会の皆様には様々な御援助をいただいた。さらに、日本道路公団金沢建設局の戸内豊造氏、鈴木勝氏および広野満信氏、同局長浜工事事務所の串田義市氏および益田稟三氏には種々お世話いただいた。末尾ながら感謝の意を表したい。

第1章 位置と環境



図1 調査遺跡位置図及び周辺古墳分布図

- | | | | | |
|----------|---------|-----------|-----------|----------|
| A 丁野遺跡 | B 四郎崎遺跡 | | | |
| 1 潤山山古墳群 | 2 物部古墳群 | 3 松尾古墳群 | 4 古保利古墳群 | 5 大塚山古墳群 |
| 6 山田山古墳群 | 7 赤谷古墳群 | 8 丁野山駒古墳群 | 9 虎御前山古墳群 | |

1. 位 置 (図1)

国鉄北陸線に乗って長浜平野を北上すると、しばらくは右手に秀麗な伊吹山と、左手に併々たる琵琶湖の景観を楽しめる。芦川の鉄橋を渡って、列車が高時川にさしかかる手前、ひなびた河毛駅に降りたってみると、正面前方に急峻な小谷山がそびえているが、すぐ眼の前には二つの丘陵性の小山をのぞむことができる。左手東北方にあるのは丁野山（標高 171m）といい、右寄り東方にあるのを虎御前山（標高 218m）と称して、両者は指呼の間に存する。ともに南北に細長い、屈起する丘陵性の小山であるが、虎御前山には、織田信長が小谷城を攻めるにさいし陣を置いたと古記録にみえ^①、一方の丁野山には、虎御前山を失った浅井勢が出城を築いたとも伝えて^②いる。実際、遺跡の分布調査によってみると、そこにいくつかの砦跡を見出すことができる。そしてこの丁野山

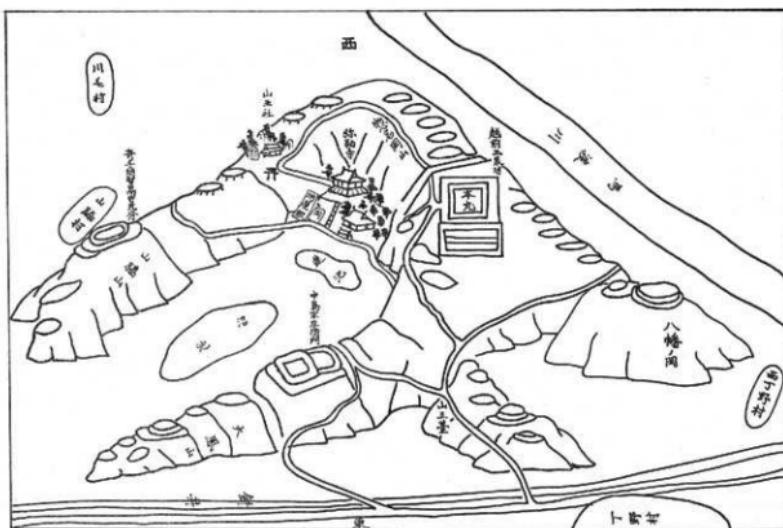


図2 丁野山古砦図（『小谷村志』より）（尾根上の円丘は古墳を示すと考えられる。）

と虎御前山とが、このたび発掘調査を行った丁野・四郷崎両遺跡のそれれ立地する地点なのである。

後述されるごとく、発掘調査の結果によれば、丁野遺跡は弥生末期・古墳時代初頭における高地性の集団墓地と性格づけることができ、四郷崎遺跡は6世紀前半の横穴式石室を有する円墳とみなすことが可能である。両遺跡の所在する湖北町の附近が比較的古くより開けた土地であることが想像されるが、同町ではつとに、それより以前の縄文時代遺跡の存在も知られている。そこで以下に、縄文文化以降、古墳時代に至る遺跡の分布と性格を述べて、古代におけるこの地域の環境を知る便宜としたい。

2. 歴史的環境 (図1)

(1) 縄文時代

湖北町尾上沖の湖底から縄文土器がひき上げられたのは、すでに早く大正期のことと屬する。押型文という文様上の特徴によって縄文時代早期に位置づけられるが^①、それは琵琶湖周辺に住みついた縄文人の最初の蹟とされる。そのほか同遺跡からは縄文全期にわたる各種形式の土器類を豊富に出土し、この周辺での縄文人の生活が長期間維持されていたことを物語っている。しかし縄文早期末から縄文前期に至る湖南の石山遺跡が、瀬田川を眼前にひかえた低い台地上に位置する貝塚であるのに対し、尾上湖底遺跡は文字通り湖底 70 m 近くに沈んでいるため、その性格を明確に把握することは難しい。縄文時代の遺跡はここ以外湖北町では見られないが、湖北地方全体に視野をひろげると、中期遺跡として木之本町の古橋遺跡や川合遺跡、浅井町の醍醐遺跡、山東町の番の面遺跡などを、伊吹山麓に見出すことができる。古橋・川合両遺跡は高時川中流の河岸に位置し、醍醐遺跡は姉川の支流である草野川の東岸に立地して、それぞれ河川を利用した漁獵活動を想像しうる。これらの遺跡から多数出土した石鏃類が、その想定を裏づけるのである。また番の面遺跡からは、石鏃 1 個しか出土していないのに対し、70個あまりの石鏃が発見されていて、ここでは狩猟に生活の比重がかかっていたことがうかがわれる。このように伊吹山麓では、漁獵・狩猟活動を中心として中期縄文人の生活が展開されていたのである。このあと湖北では、縄文後期の伊吹町伊吹遺跡、晚期の伊吹町杉沢遺跡などがひき続い伊吹山麓に営まれるが、一方米原町の入江干拓遺跡など海岸にも晚期の遺跡が遺出してきて、この時期における生活範囲の拡大を示すことができる。湖北町の尾上湖底遺跡や米原町の入江干拓遺跡をのぞいて、湖北地方の縄文遺跡は中期から後・晚期にかけて、主として伊吹山麓に分布する。その間、中期前半までは畿内の、後半以降は中部・関東の強い影響を受け、晚期に至って瀬戸内地方の影響下に入る。この事実は、湖北地方が東・西両日本の縄文文化の影響を交互に受け、徐々に発展してきたことを示していると考えられる。^②

(2) 弥生時代

縄文時代につづく弥生時代の遺跡についても、湖北町周辺ではまず尾上湖底遺跡を考慮に入れなければならぬ。弥生中・後期に属する土器類が、かなり豊富にひき上げられているからである。その中で特に注目されるのは、穀物の貯蔵に用いられる大型の壺がほとんど見られず、中・小型の壺や甕に限られていることで、その事実は、この周辺の人々が縄文以来の狩猟・漁獵の生活を容易に変更しなかったことを暗示するものと解釈されている^③。ともかく同遺跡の中型壺に櫛描文が施されている点は、櫛描文の最盛期をむかえる畿内第3様式の弥生文化の余波をうかがわせるに足る。しかし湖北地方における弥生文化の最初の供給地は畿内ではなく、伊勢湾地方であったらしい。第1様式の中の段階に相当する伊勢湾系の水神平式土器が長浜市の川崎遺跡から出土され、それが湖北における弥生文化の端緒をなすと考えられるからである。その後、長浜平野では大辰巳遺跡や鴨田遺跡など、弥生中期初頭畿内第2様式以降、畿内と伊勢湾の影響を交互に受けた土器がおびただしく出土する。いうまでもなく弥生文化は、稻作農業を生活の基盤とする文化であったから、定住による耕地の開拓と維持を必須な条件

件とした。しかも弥生時代の少ない労働力と低い技術でイネを育てることが可能な地域は、用水路を作つて灌漑する必要のない湿地に限られていた。濁出はイネの穀りも悪く、収穫量も多くない代りに、簡単な排水施設によつて耕地を獲得できたから、弥生人が最初に可耕地として選んだのは湿地周辺だったのである。⁹長浜平野においても、これまで明らかにされた弥生遺跡のはほとんどが現在の半浸田地帯を出ない。しかも重要なのは、低湿地の水田が往々水害などによって甚だ安定性を欠くとされながら、長浜平野のばあいそこに点在する弥生集落に比較的継続型が多いという点である。

弥生中期中頃（畿内第3様式）の段階に成立したとみられる鶴田遺跡は、ひきつづき中期後半に属する台付縄形土器や後期後半のS字状口縄甌を出土し、古式土器の2つのメルクマールとされる小型丸底甌や二重口縄甌とともに多數出土していく、その遺跡が弥生中期から古墳時代前半まで存続したことが確実に推定できる。また現在発掘調査中の長浜市国友遺跡は、S字状口縄甌や古式土器、さらには5世紀中頃の須恵器も出土していく、この附近の集落も弥生後期から古墳時代中期にかけて永く維持されていた可能性が強い。つまり鶴田・国友両遺跡は、弥生時代から古墳時代にわたって永く維持された継続型集落の代表例と理解できるのである。そしてこのような安定した農耕集落の掌握を通じて築造されたのが、長浜市の東方丘陵上に位置する茶臼山古墳であった。全長95mの前方後円墳であるこの古墳は古墳時代前Ⅱ期（4世紀後半）に比定され、長浜平野における最古の古墳であるが、その周辺には首長墓の系譜をひくとみられる前方後円墳が若干の円墳を從えて築かれており、この時期すでに強力な地域的統合が成立していた事実を推定できるのである。

（3）古墳時代

そしてこの長浜茶臼山古墳と同じ前Ⅱ期に属する古墳が、実は湖北町山本の神奈備山南麓にも存在しているのである。全長55mの前方後円墳若宮山古墳がそれで、これ以降、若宮山古墳の被葬者につづく各世代の首長たちは、その北方西野山丘陵の尾根上に、五世代にわたって前方後円墳や前方後方墳を築造してゆき、その類縁者・群臣たちも従属的なかたちで前方後円墳・円墳・方墳といった墳形の古墳を築いているのである。この古墳群が眼下にひかえる尾上は、余呂川の琵琶湖への開口部で、伊香郡への入口の役割を果たし、北方の塩津渓とともに、日本海方面への門戸として古代湖上交通上の要所を占めていた。そのような点から、西野山（古保利）古墳群の被葬者たちは、湖上交通の管掌者の地位にある首長として、勢力を有していたと考えられている。尾上と至近距離にある今西遺跡は、先年の発掘調査の結果、古墳時代初頭ごろの住居址と目され、大小の土錐17個の出土をみた。遺跡と湖岸との距離200mを考慮に入れると、尾上周辺での漁業が推定できよう。この今西遺跡や尾上港をすぐ西方眼下にひかえた若宮山古墳の被葬者は、湖上交通や漁業に從事する人々を掌握して勢威をふるった海人系の首長であった可能性がきわめて強いのである。また近年高月町東阿閉でも、今西遺跡とほぼ同時期の古式土器をともなう溝跡が発見されるなど、従来ほとんど知られることのなかった余呂川流域における弥生から古墳時代にかけての遺跡の実態が明らかになりつつある。この東阿閉を中心とする区域は、『和名抄』によって安曇郷と呼ばれ、西阿閉には余呂川にかかる安曇橋という橋があつて、安曇の名を現在に留めている。阿閉（アツジ）はまたアベとも訓まれ、孝元天皇の皇子大彦命を祖とする阿閉臣を想起させるが、アベも実はアヅミ・アタミ・アドと同じく、安曇氏と関係の深い地名である。『天武紀』元年六月の条に粗番瓦（イカゴ）臣安倍なる人物の名がみえ、伊香郡に安倍氏の住した一証となしえよう。記・紀によると、安曇氏は筑前國輪屋郡安曇郡を

本拠とし、綿津見の三神を率する海人系の氏族であった。しかし安曇氏が全国各地に分派繁衍した歴史は古く、『神名帳』、『播磨國風土記』、神楽歌などに散見する阿波・播磨・伊勢の安曇氏のほか、因幡・若狭・近江・三河・美濃・信濃など、安曇氏の足跡は枚挙にいとまがない。⁹ 海人族であった安曇氏の一部が近江に入り、尾上に據って湖上交通をおさえ、のちの安曇郷のあたりを支配して西野山古墳群を築いた可能性は十二分にある。『万葉集』十六「筑前国志賀の海人の歌十首」をみると、その左注に、海人の中には渤海のかたわら農耕に携わる者もいたとあるから、安曇氏の一部が尾上から余呂川を遡って安曇郷を拓いたのかもしれない。また安曇氏は、鉄の採鉱鍛冶とも無縁ではなかったといわれる。『続日本紀』にいう近江浅井郡の製鉄と安曇氏との関係もいちおう推定しておいてよいであろう。西野山古墳群を築いてのち、安曇氏は湖西にも進出したらしく、安曇川北岸に5世紀中頃から築造されはじめる熊野本古墳群は安曇氏の系譜に遡なるとされている。また、安曇川上流の朽木村には、正月の行事にシイラを供えて共食し、神主が年末若狭海岸まで出かけて水やりするシイラ祭がある。神社にものこの地区には海神を祀る社が多く、これら海にまつわる神社や風習は、あるいは海人系の安曇氏のもたらした信仰であるかもしれない。また湖西の今津には阿志都弥神社というのがあり、天平宝字6年の『近江国符案』に高島郡葦積郷の名がみえる。このアシツミが安曇から出た姓だとすると、『推古紀』31年に小德近江脚身臣飯蓋を征新羅副将軍に任せたというのも、今津あたりに拠った安曇氏の支族アシツミ氏配下の水手を背景に考えれば、容易に納得のゆく人事であろう。ともかく、湖北から湖西にかけて安曇氏が勢力をふるい、湖西・湖南の和珥氏¹⁰、湖東の息長氏などの海人族と連携対峙しつつ湖上交通を掌握していたことは事実であったと思われる。

西野山古墳群が築造されてのちしばらくすると、丘陵東側の東・西物部（モノベ）の周辺平野において、大型で、ときに周濠を有する前方後円墳が數基築かれている。この物部部落を中心とした地域は、その地名とともに、物部氏の祖とされる伊香色誕命・伊香色男の伊香を冠する伊香郡に属する点から、古来物部氏の近江における根拠地とされた。そして5～6世紀の間に築造されたとみられる物部古墳群は、5世紀中葉以降、大和朝廷の北陸への進出にともない日本海への門戸にあたる尾上を掌握した物部氏が、現在の物部部落の周辺に築いたものと推定されているのである。しかし物部古墳群の被葬者は、実は物部氏自身ではなく、中央の物部連の下に地方的伴造として掌握された伊香郡在地の豪族であったとみた方が、より真実に近い。たしかに『六国史』などをみると、近江の人として物部伊賀麻呂や物部赤範の名がみえる。しかし「物部の八十氏」と称されるものがすべて物部氏であるとは思われず、伴造物部連と擬制的な同族関係を結んで物部氏の同族系譜に加わり、その名を居地名に留めた在地の豪族も多かったとみられる。物部の分布は全国にわたってきわめて広く、近江においても東・西物部のはか、東太郡物部郷の名が『和名抄』にみえる。また伊香郡には、兵主、石作、玉作など物部系の神社と目される式内社も多い。しかし神社・郷村への物部の名の定着は、大和物部氏の部を媒介とした全国の開発、収奪の結果にほかならない。物部氏が大和朝廷の全国的な収奪体系の確立に参画し、権力の中枢にあって部を掌握する大連の位置を占めたのは、5世紀後半から6世紀初頭にかけてとされる。すなわち物部古墳群が築造される時期に相当する。物部古墳群の被葬者とは、品部の集団を伊香の地にあって支配しながら、それらを率いて中央の大連物部氏に隸屬していた地方的伴造であり、あるいはそれは安曇氏の系譜に遡なる首長であったかもしれない。先述の推定によれば、安曇氏によって湖北の鉄穴は開かれた可能性も考えられる。製鉄に従う品部を掌握しつつ安曇氏が物部大連に隸屬したと考えれば、安曇郷に物部の地名や兵主神社を残す事実も、無理なく解釈できるのである。しかし物部古墳群の被葬者は、同時に余呂川流域の平野の開拓にも積極的にとり組んだと思われる。その古墳群は、丘陵尾根上の西野山古墳群とはその立地を甚だ異にし、余呂川流域の氾濫原に位置して、古墳築造

と平野の開拓、生産基盤の確保が強く結びついていたと考えられるからである。この周辺における弥生以来の遺跡としては、現在までのところ、分布調査によって集落跡と推定されている湖北町山本の古木遺跡や、先述の古式土器を出土した東河閉の遺跡が挙げられる。これらの遺跡は、長浜平野における弥生遺跡のほとんどが姉川の氾濫原に分布しているのと同じく、余呉川の氾濫原に立地していて、弥生以来の農耕地が古墳時代中期に至ってより一層拡大されていったことが、物部古墳群の築造から推測できるのである。

一方、高時川の流域の氾濫原にも弥生時代以来、農耕集落が営まれていたらしい。後で詳しく述べられるように、今回の発掘調査で明らかとなった丁野遺跡は、弥生末期から古墳時代初頭にかけての集団墓地と規定できるが、それは丁野山の近傍に弥生集落の存在を確実に推測せしめる。またこの丁野山と、同じく高時川東岸の丘陵である虎御前山には、その尾根上に頗る古墳群を見出すことができる。丁野山のばあい、各尾根上には總計して、前方後円墳3、帆立貝式古墳1、円墳40余基が築造され、虎御前山の各尾根上にも、前方後円墳2、円墳數十基が築かれているのである。これらの古墳群が、高時川流域の平野をその生産力的な基盤として築造されていたことは、ほとんど疑いえないであろう。

余呉川流域とは異って、高時川周辺には史乘に名のある有力豪族の居住の跡をみず、西野山・物部両古墳と丁野・虎御前山の各古墳群の性格の相異も、従来漠然と指摘されているにすぎなかった。しかし、生活と生産と信仰という地域に根づいた考古・民俗・歴史学の地道な努力と連携によって、この地区的過去のヴェールも徐々にはがされてゆくことであろう。今回の丁野・四撫崎両遺跡の発掘調査によってこの地区的古代史の解明される可能性が大きく開けたが、以下にその結果を報告して、地域史の科学的認識に資せんとするものである。

(谷口 義介)

注

- ①『信長公記』巻三。
- ②『東浅井郡志』第二卷。
- ③滋賀県教育委員会『滋賀県遺跡目録』(1960年)。
- ④小江慶雄「琵琶湖地方の最初的文化の展開」(『水中考古学研究』1968年)。
- ⑤滋賀文化財研究所『滋賀文化財研究所月報』11(1969年)。
- ⑥小山鹿雄「滋賀県畠の面積式住居遺跡について」(『京都学芸大学学報』A, No. 9, 1956年)。
- ⑦岡田茂弘「編文化の発展と地域性——近畿」(『日本の考古学』II, 1965年)併看。
- ⑧小江慶雄「琵琶湖水底の試」(1975年)。
- ⑨田辺昭三・佐原 真「弥生文化の発展と地域性——近畿」(『日本の考古学』III, 1966年)。
- ⑩滋賀県教育委員会「国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書」(1971年)。
- ⑪滋賀県教育委員会「国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書」II(1973年)。
- ⑫八賀 晋「古代の農耕と土壤」(『古代の日本』2, 1971年)。
- ⑬滋賀県教育委員会「国道8号線長浜バイパス関連遺跡調査報告書」III(1973年)。
- ⑭佐原 真「農業の開始と階級社会の形成」(岩波講座『日本歴史』I, 1975年)。
- ⑮伊達宗泰・森 浩一「生活の変化——土器」(『日本の考古学』V, 1966年)。
- ⑯1975年12月現在、調査区域内からは住居址らしき造構は検出されていない。
- ⑰丸山竜平・福岡深男「滋北の古墳とその世界」(『古美術』29, 1970年)。
- ⑱中谷雅治・田中勝弘「伊香郡高月町古保利古墳群調査報告」(滋賀県文化財保護協会『昭和48年度滋賀県文化財調査年報』1975年)。
- ⑲湖北町教育委員会『滋賀県湖北町今西遺跡発掘調査報告書』(1974年)。
- ⑳尾畠喜一郎「南都の民」(『古代の日本』2, 1971年)、倫崎干城「阿曇氏考(I)」(『文化史研究』第21号)、大場義雄「信濃国安藤族の考古学的考察」(『考古学から見た古氏族の研究』)。
- ㉑尾畠喜一郎「南都の民」(前掲)。
- ㉒山崎秀二「新旭町における古墳時代」(滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会『滋賀県文化財調査報告書』第5回)。

- 1975年)。
- ◎ 中西常雄「高島郡古代の氏族」(同上書)。
 - ◎ 和邏氏については、岸 俊男「ワニ氏に関する基礎的研究」(『日本古代政治史研究』1966年), 角川源義「まほろしの豪族和邏氏」(『日本文学の歴史』第1巻), 丸山充平「近江和邏氏の考古学的研究」(『日本史論叢』第4編, 1974年)。
 - ◎ 息長氏については、黒沢幸三「古代息長氏の系譜と伝承」(『文学』昭和40年12月号, 1965年), 岡田精司「雄略天皇の川自とその背景」(『日本史研究』128号, 1972年), 藤田香融「皇祖大兄御名入部について」(『日本書紀研究』第3回, 1968年)。
 - ◎ 中谷源治・田中勝弘「伊香郡高月町古保利古墳群調査報告」(前掲)。
 - ◎ 大田 充「姓氏家系大辞典」1934年。
 - ◎ 野田誠志「物部氏に関する基礎的考察」(『史林』51—2, 1968年)。
 - ◎ 尾上に掲った安藤氏の方は、これとは別に、「海人の宰」とされた阿蘇連の下に統率されていた可能性がある。
 - ◎ 物部氏が武具の製造から発して軍事器備のことを管掌した点については、直木末次郎「物部連に関する二、三の考察」(『日本書紀研究』第2編, 1972年), 横田健一「物部氏祖先伝承の一考察」(『日本書紀研究』第8冊, 1975年)。
 - ◎ 「滋賀県遺跡目録」は丁野山について、丁野墓地遺跡一円墳2, 仲遺跡一円墳5, 丁野遺跡一前方後円墳2, 円墳12, 岩原道路一円墳7, 中谷遺跡一円墳10余, 東足遺跡一帆立貝式古墳1・円墳1, を挙げる。
 - ◎ 虎脚山山については、同上目録は、敷喰山遺跡一前方後円墳1・円墳数基, 四脚崎遺跡一前方後円墳1・円墳3, 小四郎ヶ峰・大洞林・岡山・天目山・別所の各遺跡一円墳数基, 小塚遺跡一円墳1, を挙げている。

第2章 四郷崎古墳

1. 調査経過

調査は49年夏からの予定であったが、立木の伐採等に期日を要したため、11月21日になって開始された。

当古墳はその墳頂部が大きくL字形に盛み過去に大がかりな盜掘があったものと考えられていた。そしてこの被掘壙内部には石材が全く露出していなかったため、主体部の構造に関しては全く予測しえなかったものである。このため、地形測量、写真撮影の後、墳頂の被掘壙に沿うグリッドを設定して、内部を除々に削り下げるという方法をとった。その際黒色土より多量の弥生式土器片の出土があり、さらに大小の碎石が乱雑な形で現れたため、主体部の性格は益々、判断しがたいものとなつた。このため被掘壙にはば直交するトレンチを設けた。これによって断面観察を行なった結果、封土には黒色腐根土、黄褐色粘土が主に使用され、また多量の土器片が封土内に混入していることが判明した。またトレンチ最奥部では石材の一部がみられたため、主体部は石室であるとの確信を得たのである。

12月中旬になって玄室側壁が現れ始めたが、内部には多量の碎石あるいは側壁石のくずれ落ちたものが重なり、これをとり除くには大きな労力を必要とした。また天井石と思われる石材は遺存せず、墳頂部の被掘壙は後で石材を確保するために掘られたものと思われる。1月初めから大量の積雪のため現場作業はたびたび中断され、石室内部の埋土が完全に除かれたのは2月中旬になった。玄室内からは多數の須恵器、鉄製品、また被葬者の遺骨等が発見されたため、実測、写真撮影に期日を要した。この人骨は痕跡が残るのみで、原型のままとり上げることはできなかった。

石室内部の調査が完了した後、墳丘の東西を4分の1づつ層序に従ってとり除いていった。墳丘は斜面下部に大きく流れおり、封土が周囲の黒色表土と極似するため、その形態を検出するのは困難であった。しかし墳丘裾は地山上に明瞭な墳丘築造に先立つ整形の痕がみられたため比較的容易に確認できた。

封土内には多量の土器片が発見され、封土除去後の地山に溝、ピット、段が発見されたため、実測、写真撮影には予想以上の期日を費した。

(鬼柳 彰)

2. 遺構 (図3~5)

1) 墳丘

四郷崎古墳は虎御前山北端の斜面に築造されており、現状では径約18mのほぼ正円をなしている。現高は北端裾部から約3.6mを計るが、斜面上方の南裾との高低差はわずかに0.8mである。

先ず当古墳を築造するに先立つて行なわれた地山の整形について考えてみよう。特徴的なことは、盛土すべき

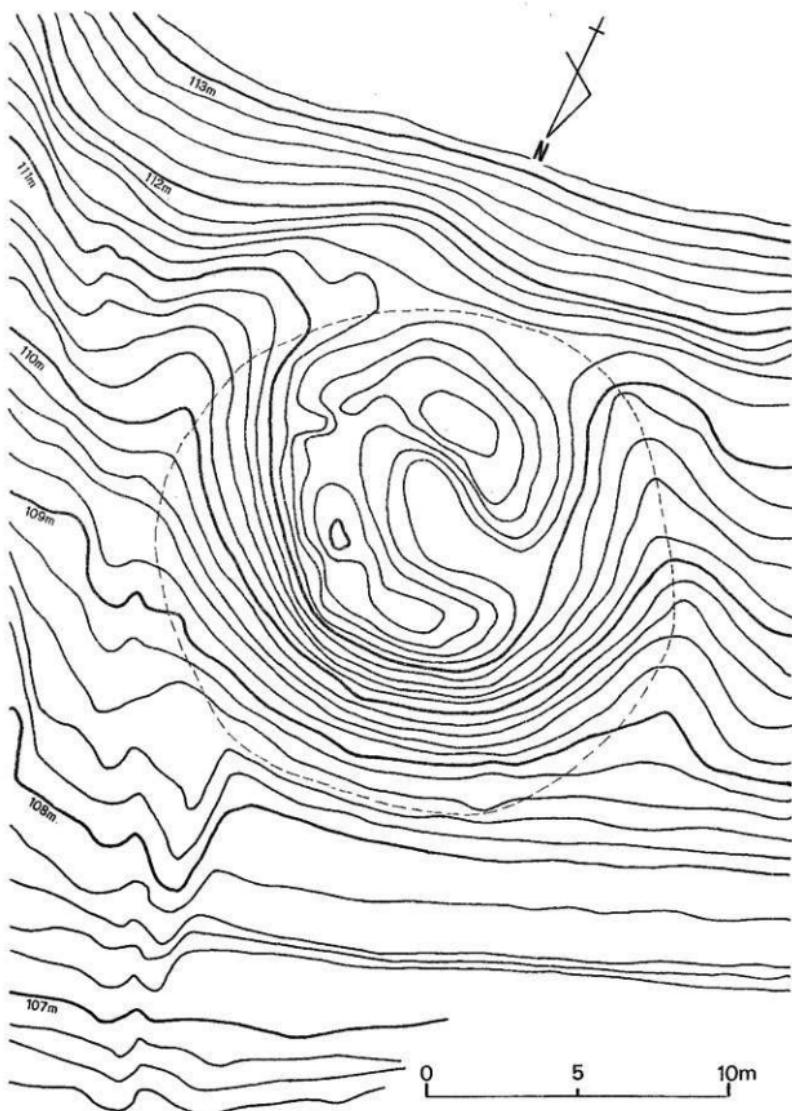


図3 四郎崎古墳地形測量図

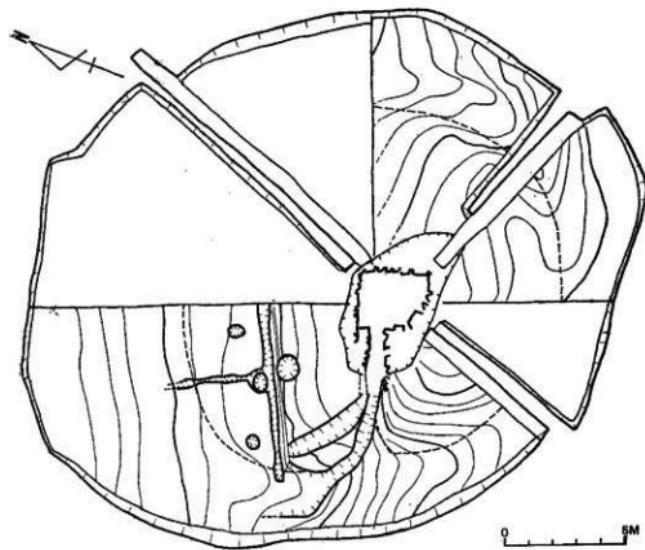
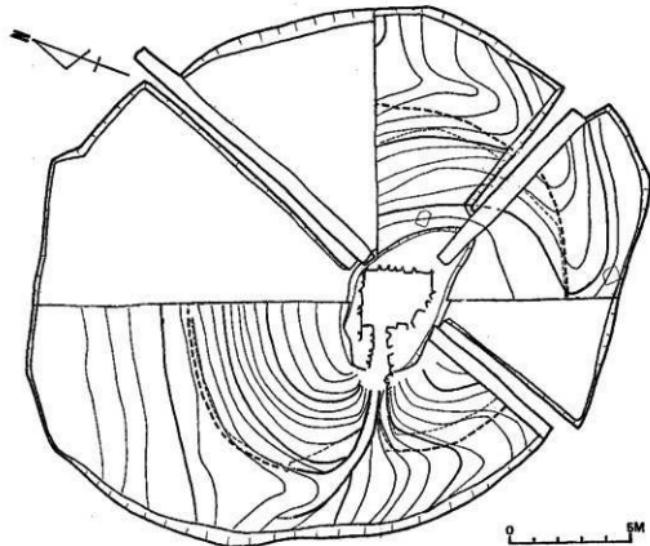


図4 四郷崎古墳発掘後地形測量図
 (上) 墓土除去後の墳丘測量図 (下) 封土除去後の地形測量図

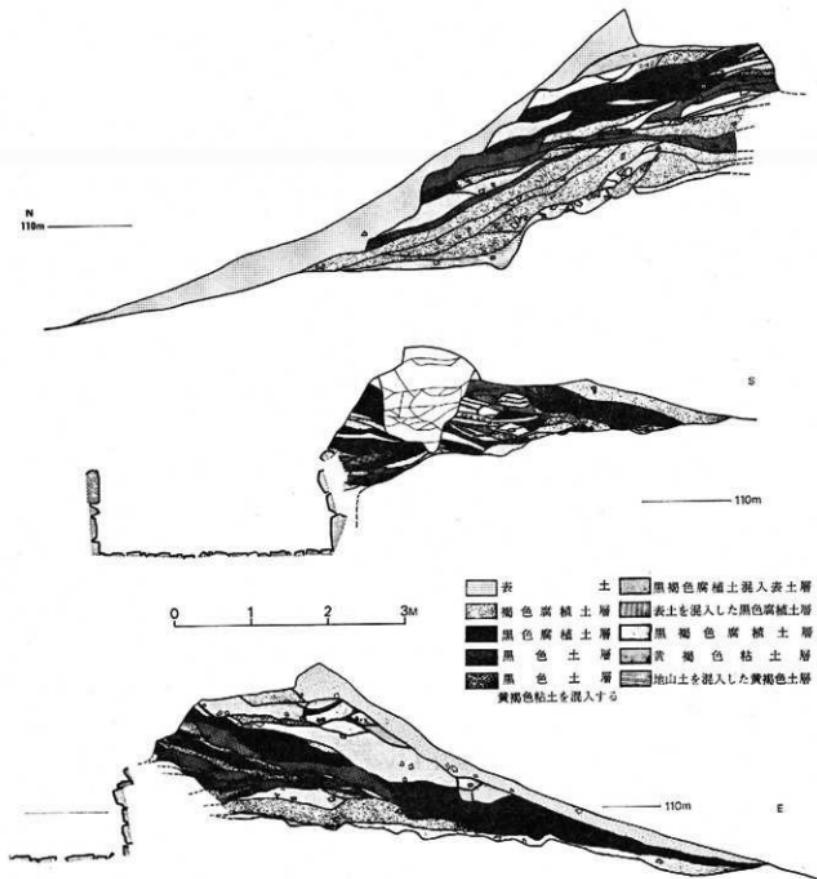


図5 四郷崎古墳横断面実測図

部分の周囲の地山を、ゆるやかなU字形の周濠状に穿ち、台形状の自然地山を残し、そのほぼ中央に石室を構築するための掘り方を設けていることである。さらに溝道が造られる部分には、玄室掘り方より続く排水溝が前もって、穿たれていたものと考えられる。この台状地は斜面上方では、埴丘掘として利用されているが、玄室掘り方から約4mの所で石室軸線に平行して切られ、約50cmほどの段をなしている。この段より下の盛上すべき部分はほぼ水平に削平されている。またこの段の直下には、これに接して深さ約10cm、巾20cmの溝が造られ、さらにこれに直交する同様の溝が削平部分の北端へ続いている。そしてこの段の上に一つ、下の溝が交差する部分に一つ、その東西一つづつ径約30cm、深さ50cmの人口的な穴が穿たれている。また台状地の西端、溝道から

続く排水溝の東にもさらに一条の深い溝が造られていて、これは築道入口での排水溝から分かれ、段の上で消えている。この地山に造られた段はおそらく墳丘封土の流失を防止するために造られたものと考えられ、3条の溝は墳丘内部の水分を排出するために設けられたものであろう。墳丘北東四半部は掘り下げを行なわなかったため明確ではないが、トレンチ及び東裾部でみると、この段は低くはなるが墳丘東端まで石室に平行して続いている。

墳丘は、以上のように整形された地山の上に築造されている。現状で玄室の石組は3段から5段を残しているが、玄室側壁の後方を固めた土層をみると、さらに3段ないし4段の石組があったものと考えられる。

玄室掘り方は完掘しなかったため明確ではないが、右側壁では2段～3段左側壁で1段から2段の石組を内部に行ない、後部に土を詰め、順次、石材を積みながら、後方を固めていったものと思われる。これは主に黒色腐植土、及び黄褐色粘土が5～10cmほどの厚さで積み重ねられ、特に上部では多量の碎石を混入させている。この側壁後方の固めは、奥壁ではその後方約3m、右側壁で2.5m、左側壁では4mにも及ぶ。特に左側壁後方では斜面が玄室から離れるにつれて下っているため、前述の地山に設けた段を黒褐色土層で一旦覆った上に、側壁後方を固めている。

封土はその上からさらに数回にわたって盛られた北端裾部からの高低差約4.5mほどの墳丘を築造したと考えられる。

墳丘封土内の主に黒色腐植土層からは、多量の土器片の出土をみた。これらの土器片は弥生時代末のもので完形品はみられないが、かなり大型の破片が出土する。後述するように玄室内に埋葬されている須恵器は6世紀代のものと推定されるのであるから、当古墳築造時より約2世紀以上も遅い時期の遺物が墳丘内に混入していたわけである。現在、この付近には集落跡等の遺跡は知られていない。しかも、墳丘周囲からも他の遺構あるいは遺物の発見が無かったため、これらの土器片が何処から運ばれたものかは全く不明である。墳丘を形成する土層をみても黒色腐植土は周囲の表土と極似している。また黄褐色粘土層は表土下にみられる地山を削り取ったものと思われ、封土内に混入している碎石も周囲の地山上に多量にみられるのである。

2) 主体部 (図6)

主体部は横穴式石室である。玄室は横長で、横3m、縱2.3mを計る。築道は巾約50cmで大きく左へ寄り、右袖部2mに対し、左袖では約50cmを計るにすぎない。石室全長は5mで、平面的には築造時の状態を良く保存している。

玄室の石組みは全て横積みである。奥壁が比較的小型の石材を使用しているのに対し、左右両側壁では、面を切った大きな石材を使っている。前壁は下段にやや大型の石を使用するが、左右側壁に比べると小型である。奥壁は石材が小型であることと、軟かい堆石岩を使用しているため、保存状態は最も悪い。これに対して、右側壁から西南隅にかけては大型石材が使われ、また上段になるに従って内側にせり出し、多少の土圧による移動も考えられるが、持ち送りを遺存しているものと考えられる。左側壁では右側壁に比べて小型ではあるが整然とした横積みの状態を残している。基底部をみると奥壁及び前壁が先ず置かれて次に左右側壁を設置している。さらに左側壁をみると4段目の石材は玄室前壁を越えて延長され築道左壁は二段構造を為しているように見える。

玄室床面には10～40cmほどの扁平な碎石を全面に敷きつめている。これは地山前平面上に置かれ、築造時の状態をほぼ完存しているものと思われる。床面は東西、南北方向共ほぼ水平面にある。

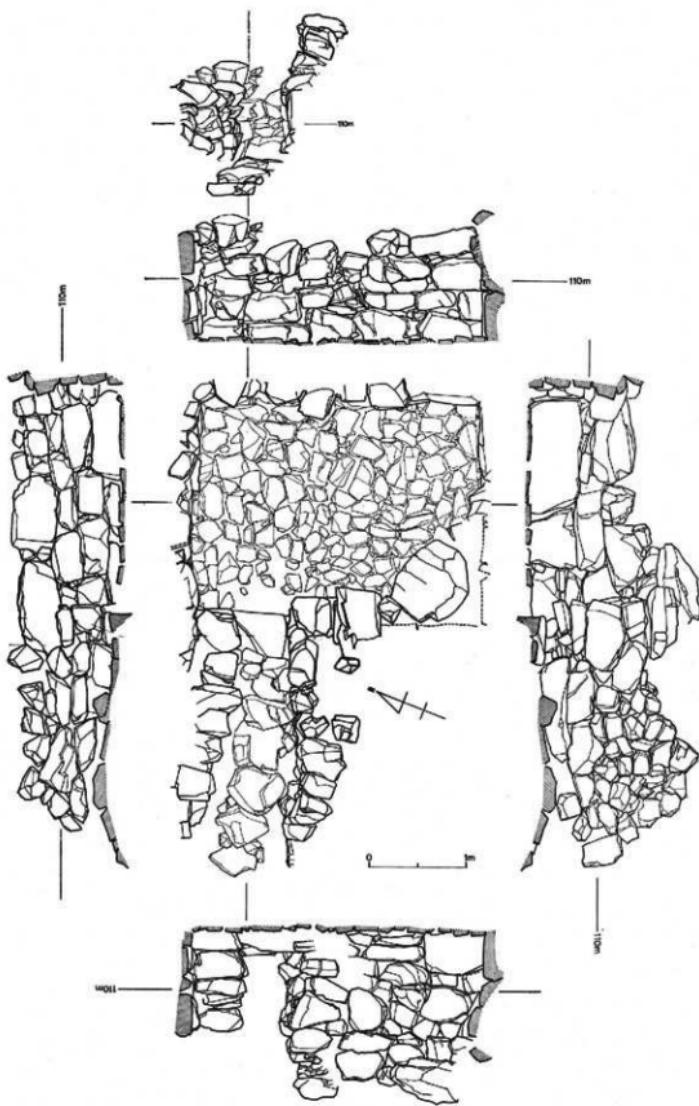


圖6 四鄉斬古墳石室尖測圖

葬道は玄室中央より左へ 75 cm に位置し、左右壁共にやはり横積みである。下段では比較的大型の石材が使用されているが、總体的に玄室に比べて小石材を積んでいる。特に右壁上段の開口部に近い部分では径 20~30 cm の小碎石が粗雑に積み上げられており、明らかに後代に修復したものと思われる。また葬道部には小型の碎石によって簡単な閉塞が施されていた。これは葬道床面より 15 cm 以上にあり後代に設けられたものと考えられる。葬道床面は 7 個の扁平な石が並べられているが、これは排水施設である暗渠の蓋石である。葬道と玄室床面では約 10 cm ほどの段をつくり、開口部では階段状をなしている。

3) 遺物出土状態 (図7)

当古墳より発見された各種遺物を上げると次の通りである。須恵器〔玄室左袖部より〕広口壺 2 点、有蓋壺 1 点、直口壺 1 点、土師器壺 1 点、高杯 1 点、提瓶 2 点、杯身 17 点、同蓋 16 点、〔玄室中央部より〕提瓶 1 点、高杯 3 点、管玉 3 点、〔前庭部より〕杯 (セット) 1 組、环蓋 1 点、高杯 2 点、鐵鎌 [玄室内] 42 点、刀子 [玄室内] 2 点、被葬者のものと思われる人骨一體

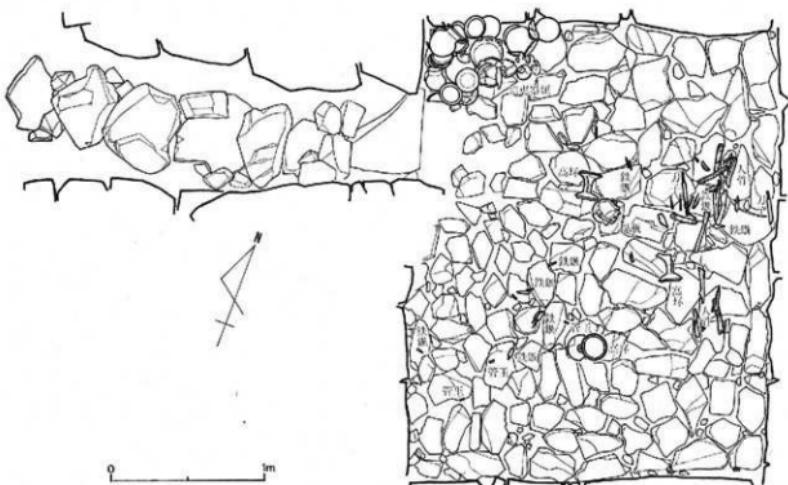


図7 四脚崎古墳石室床面尖削圖及び遺物出土状態実測圖

玄室内より発見された各種遺物は全て床面上あるいは、床面上数センチにあった。須恵器は 6 世紀前葉、中葉、後葉の 3 期に大別されるが、玄室中央部に発見された提瓶、高杯は 6 世紀後半のものと考えられることから、発見された人骨は最後の即ち第 3 回目の被葬者の遺体と思われる。

左袖部に集められている須恵器は主に 6 世紀前半から中期のものであるが、その時代差は積み重ね方に現れていない。すなわち、第 3 回目の追葬の際、前 2 回分の副葬品を玄室左袖部分に寄せ集めたものと考えられるのである。人骨と共に発見された刀子 2 口及び十数本の鐵鎌は全て、この被葬者に供獻された副葬品と思われる。管玉 3 点、及び鐵鎌 8 点は主に玄室西半部に発見されたが、これらがどの段階で副葬されたかについては断言でき

ない。しかし前2回の埋葬にともなうものが主であろうと思われる。

前底部においては、3点の須恵器が発見されたが、高杯2点は6世紀後半、杯1組は中葉に比定される。

(鬼柳 彰)

3. 遺 物

(1) 須 恵 器 (図8~10)

四郷崎古墳からは、玄室内より須恵器44点・土師器1点、前庭部より須恵器6点、総計51点の出土をみた。土器の器形・胎土・焼成・色調・形状・手法・出土位置などについては、巻末の説明表に一括して掲げてあるので詳細はそちらにゆずり、ここでは全体的な特徴と推移を述べ、陶邑古窯址出土の須恵器との対比を通じて、その実年代を推定しておきたい。なお封土内より、おびただしい量の弥生式土器片の出土をみたので、それについても簡単な説明を加えておこう。

坏 坏の身〔A〕は計19個出土したが、大別して3類に分けられる。

(i) 大型で、口径平均13.0cmを測り、口縁部に端面を有する。受部は水平に外にのびるものから、外上方にのび、それにともなって立ち上りと受部の境にV字溝をめぐらす傾向が現われる。胎土はおしなべて悪い。11個。

(ii) 同じく大型であるが、端面を失い、口縁先端が丸味をもつ。(i)と同じく、口縁部と体底部の器厚はほぼ均しい。立ち上りと受部の境にV字溝をもつ。3個。

(iii) 口縁先端は丸く、口縁部と体部内面は段をなして接合、両者の器厚には差がある。小型化の傾向にあって、口径12.3cm平均を測る。胎土は良好。5個。

立ち上りの内傾度、および受部上面から測った立ち上りの高さは、3類ともほぼ均しい。技術的には、底部外表の約4%をヘラ削りし、その調整のさいの支え痕が底部内面中央に同心円の叩き文として残っている点も、3者に共通する。陶邑古窯址にあってはMT15窯のものから大型化し、内面スタンプもこの期に初現する。また立ち上りの内傾度および高さも、(i)(ii)とMT15とは対応させうる。しかしMT15につづくTK10窯の段階では、口縁端部の面とりはなくなり丸味をおびるようになるので、(ii)はTK10の段階に比定できる。したがって(i)をMT15に、(ii)をTK10段階に対応するものと考え、(iii)は両者の移行期として捉えたい。

蓋 坏の蓋〔A'〕は計18個出土している。天井部がふくらみ、口縁端部に面とりをしている点は、すべてに認められる。このうち口径14.6cmを測る〔A'-1〕は〔A-1〕と1セットをなし、同じく口径15.6cmの〔A'-6〕も〔A-6〕と一対になるので、両者は坏(i)の段階に入る。また口径15.9cmの〔A'-9〕は〔A-12〕とセットをなすから、これは坏(ii)の段階に入る。さらに〔A'-18〕は口径13.9cmと18個の中では最小を測るので、坏(ii)に属しうる。天井部と口縁部の境が、甘い稜線から凹線へと徐々に変ってゆくのも、上記MT15からTK10段階への移行と即応する。それゆえ蓋18個も、坏(i)(ii)と対応して3期に分けられ、MT15からTK10の段階にかけて移行すると考えられる。

高坏 高坏〔B〕は、無蓋のもの1個と有蓋のもの5個の計6個の出土をみた。無蓋高坏〔B-1〕は短脚で、

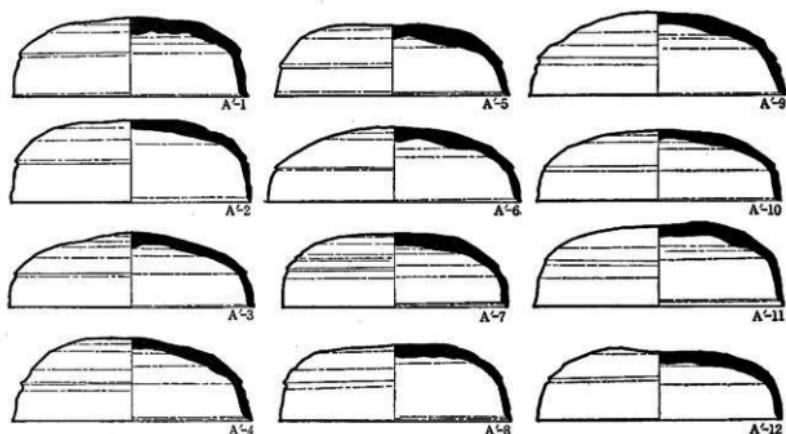
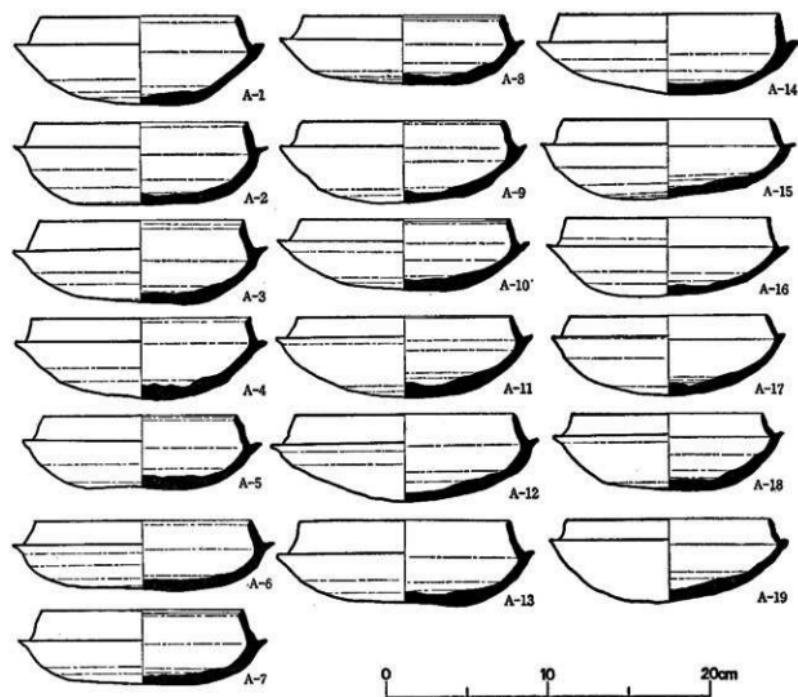


圖 8 四郎塔古墳出土遺物測量圖 (1)

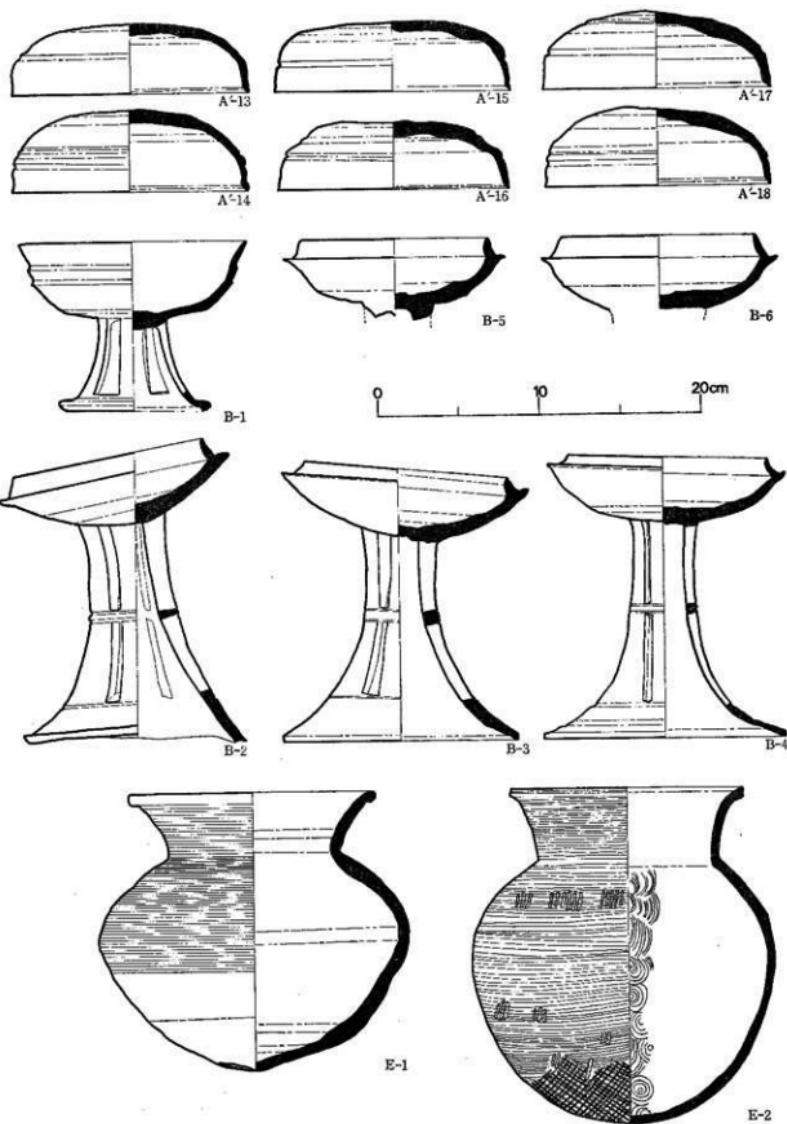


图9 四卿岭古墓出土遗物实测图(2)

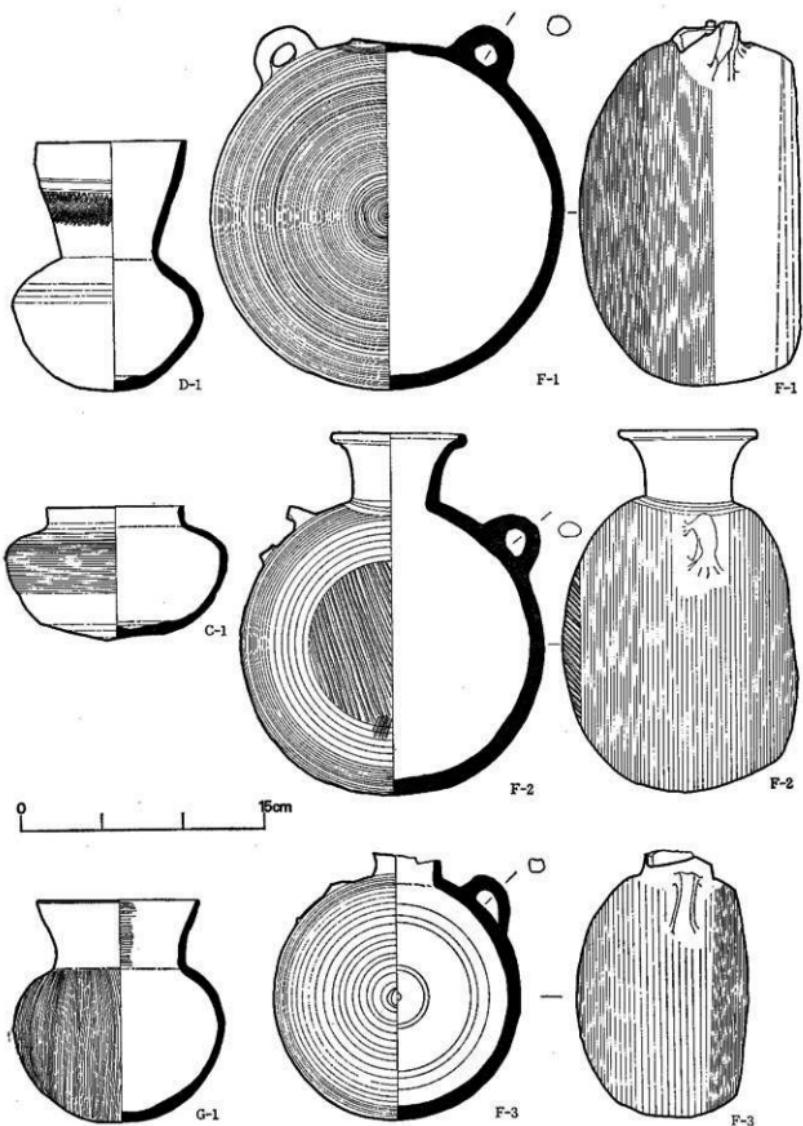


图10 四郎崎古墳出土遺物実測(図3)

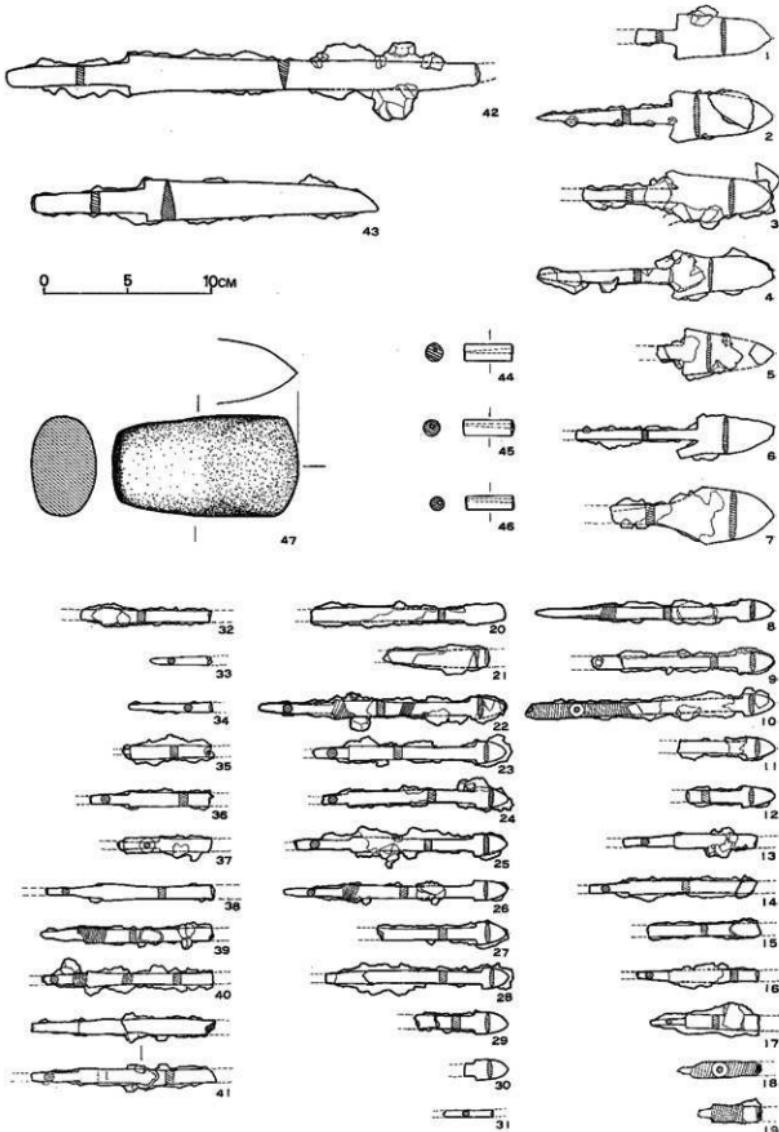


図11 四脚跡古墳出土遺物実測図(4) (但し47は、墳丘封土内より出土)

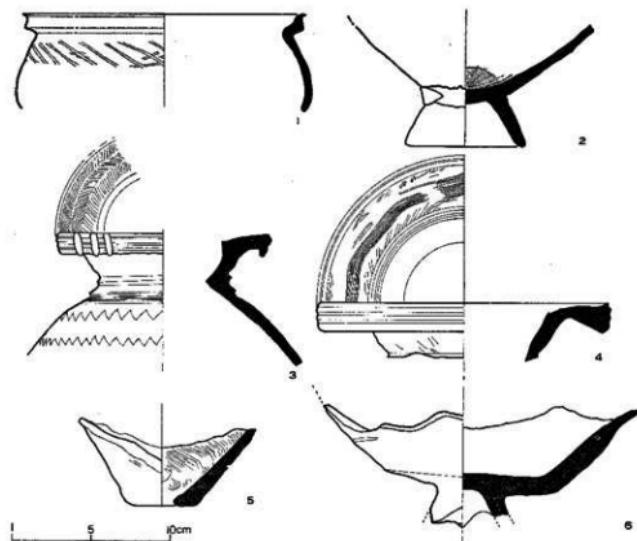


図12 四郷崎古墳墳丘封土内出土遺物実測図

梯形の一段透しを3方にあける。陶邑 TK 47 から MT 15 の段階に相当するが、坏・蓋を基準に考えて、MT 15 の初期の段階に比定したい。また有蓋高坏は、長脚で長方形二段透しを3方にあけるもの〔B-2・5〕と同じく2方にあけるもの〔B-3・4〕がある(〔B-6〕は脚柱部欠損して不明)。〔B-2・3・4〕は玄室中央部から、〔B-5・6〕は前庭部から出土している。陶邑窯において長脚二段透しが出現するのは TK 10 の段階といわれる。短脚一段透しと長脚二段透しの間に、長脚一段透しの段階が入るが、この形式の高坏は当古墳からは出土していない。したがって、坏〔1〕の段階に無蓋短脚一段透し高坏を、坏〔6〕に相当する高坏ではなく、坏〔6〕に有蓋長脚二段透し高坏を対応させることができる。

壺 壺類では、有蓋短頸壺と直口壺の他2点が出土している。短頸壺〔C-1〕は、口縁部がほぼ直立し、肩の張り出しがきつく、その高さで最大径をもつ。肩部から体部にかけてカキ目が施され、口径と器高がほぼ均しい。この形と類似するものが、MT 15 窯に見出せる。直口壺〔D-1〕は、口縁部と体部の長さがほぼ等しく、口縁部はまっすぐ上方にのびて、中ほどからやや内傾し、器表の描き波状文は5世紀代に最も盛行する点から、この直口壺は MT 15 段階に比定できよう。このほか中型で広口の壺が2点出土している。〔E-1〕は、口縁部が大きく外反して開き、胴部が張り出して径 19 cm を測る。〔E-2〕は、口縁部が外反して立ち上り、口縁部が垂直の端面を有して凹線をめぐらす点に特徴がある。ともに口縁直下から胴部にかけてカキ目を施しているが、〔E-2〕内面の体底部は同心円状の叩き目を残している。

提瓶 提瓶は3点出土したが、それぞれ時期を異にするのではないかと思われる。〔F-2〕は、短くラッパ状にのびる頸部と直立する口縁部との境が段をなす。体部は前面が丸くふくれ、背面も張り出しがいびつで、体部前面をカキ目調整しながら中央部に平行叩き目を残している。胎土が坏〔6〕と同質で粗悪な点からも、当古墳にお

ける最初期の副葬品とみられる。〔F-1〕は、体部最大径 21.9 cm と、〔F-2〕よりも大型である。口部は欠損して不明であるが、背面は扁平で、胎土も良好となる。〔F-3〕は、前2器と同じく肩部両側に環状の把手をもつが、体部最大径 15.3 cm と小型になる。背面はわずかにふくれる程度で、胎土は精良。玄室中央部から有蓋長脚二段透し高杯 3 点と共に出土しているので、それと同時期に位置づけられよう。

(2) 土師器 (図10)

玄室内からは、以上の須恵器のほか、土師器の壺〔G-1〕が 1 点出土している。球形の体部に、はじめ直立し中ほどから外反する口部・口縁部をつける。胎土は精良で、体部全面にわたって丁寧に刷毛目調整している。

以上、50点の須恵器を环身・蓋の推移、器形の消長を中心として考察すると、おおよそ 3 グループに分類できるようである。そしてこの 3 群は、それぞれ 6 世紀の前半・中頃・後半の 3 期に比定できると思われる。このような結果からして四郷崎古墳は、6 世紀前半から後半にかけて、3 次にわたりて追葬が行われたと考えられる。

(谷口 義介)

(3) その他 (図11)

鉄鎌 鉄鎌は平根式のもの 7 本、細根式（長鎌）のものが 30 数本出土した。平根式のものには切先のふくらみが内湾する定角式鎌が 1 点 (7)、破損しているが脇抜式が 4 本 (図11 の 2、3、4、6)、脇抜を持たないもの 2 点 (1、5) である。いずれも、鎌をもたない。7 は発見された人骨に供って出土し、2 は左袖部の須恵器と併せて発見された、他の 5 本は全て玄室西半部の床面直上より出土したもので、4 と 6 は重った状態で発見された。細根式鉄鎌はその半数以上 (22~41) が遺骨に重なるように並べられた状態で出土した。他の 14 本は主に玄室西半部から四散した状態で発見された。較本の完形品をみると長さは約 15 cm 弱を計り、切先の部分は全てレンズ状を呈し、茎部の端に巻糸痕を残すものもあった。

刀子 刀子は 2 口発見された、2 口共、片刃の刀でそりを持たず、人骨の附近より出土したものである。長さは一つが 20 cm (図11の43)、他は 28 cm (42) を計るが、後者は切先が破損している。

管玉 管玉は 3 点発見された。いずれも玄室西半部床面直上である。材質は碧玉、長さ約 3 cm を計る。

大型恰刃石斧 (図11の47) これは墳丘封土内より発見されたもので完形品である。実用品として使用されたものようである。 (鬼柳 彰)

最後に、封土中からおびただしく出土した土器片について、二、三付言しておこう。湖北地方にあっては弥生後期に比定される S 字状口縁鉢(1)や台付壺型土器(2)、口縁部に凹線や羽状紋を施す壺型土器 (3,4) が検出され、そのほか壺(5)・高杯(6)の破片も多量に出土している。それらの点から、この盛り土には、弥生後期の集落址のものを運搬して用いたと思われる。したがって封土中の土器破片と四郷崎古墳の築造の間には、200 年余の時間的な距離があるわけである。

参考文献

田辺昭三『陶邑古窯址群』(1966年)。

横山浩一「手工業生産の発展——土器器と須恵器——」・「古墳時代須恵器の編年略表」(『世界考古学大系』日本Ⅲ 古墳時代、1959年)。

伊達宗泰・森 浩一「生活の変化——土器——」、横崎彰一「須恵器編年図表」(『日本の考古学』V、古墳時代下、1966年)。
滋賀県教育委員会『国道 8 号線長浜バイパス開通記念調査報告書』(1973年)。

四郷崎古墳出土須恵器説明表（付、土器部）

形態 系	土器系	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴
8 环 (身)	A-1	<ul style="list-style-type: none"> *立ち上りは高く、1.8cmをこえ、内傾する。端面は内方へ傾斜する。 *受部は短く、ほぼ水平にのび、立ち上りとの接合部にV字跡がある。 *体部・底部は、受部先端から全体に丸く収める。 	<ul style="list-style-type: none"> *体部は横ナデ、底部の下半はヘラ削りで調整している。ヘラ削りの方向は、不明。 *内面は丁寧に横ナデして仕上げる。 	<ul style="list-style-type: none"> *胎土は、細砂・石粒を含む。 *焼成は良、色調は灰紫色。 *玄室左袖部より、[A'-1]蓋と重なって出土。両者はセットをなす。
8 环 (身)	A-2	<ul style="list-style-type: none"> *立ち上りは受部上面から1.6cmを測り、わずかに内傾。端面は内側に傾いて、浅く凹む。 *立ち上りと体・底部の厚さは、ほとんど同じ。口径 13.1cm。 *受部は水平にのび、先端は鋭い。 *体部から底部にかけて丸く、底部はやや扁平をなす。 	<ul style="list-style-type: none"> *底部の内面の中央に、同心円印き文が認められる。 *底部外表は、丁寧にヘラ削りして調整。ヘラ削りの方向は、時計の逆まわり。 	<ul style="list-style-type: none"> *胎土は、細砂・石粒を混入して不良。 *焼成は甘く、灰黒色の色調を呈す。 *玄室左袖部より出土。
8 环 (身)	A-3	<ul style="list-style-type: none"> *立ち上りは内傾し、受部からの高さ1.7cm。端面は内方へ傾斜し、浅く凹む。口径 12.6cm。 *受部はほぼ水平にのび、先端は鋭い。 *体部・底部は、丸く仕上げている。 	<ul style="list-style-type: none"> *底部外表は、全面にわたってヘラ削りを施す。ヘラ削りの方向は、時計逆まわり。 *底部内面中央に、仕上げナデの痕。 	<ul style="list-style-type: none"> *胎土は石粒を含む。 *焼成は良、色調は灰黒色。 *玄室左袖部より出土。
8 环 (身)	A-4	<ul style="list-style-type: none"> *立ち上りは1.4cm、やや内傾する。端面は内方に傾いて、浅く凹む。口径 13.5cm。 *受部は水平にのび、先端は甘い。 *受部と体部は内埋して統ぐが、体・底部は丸く収める。 	<ul style="list-style-type: none"> *底部全面にヘラ削りを施す。ヘラ削りの方向は、時計逆まわり。 *内面底部に粒土ひも巻き上げの痕が残す。 	<ul style="list-style-type: none"> *胎土は、細砂混入。 *焼成は、ややなまけ気味で、乳灰色の色調を呈す。 *玄室左袖部より出土。
8 环 (身)	A-5	<ul style="list-style-type: none"> *立ち上りは高く、1.8cmを測り、やや内傾。端面は内方へ傾いて、浅く凹状をなす。口径 12.0cm。 *受部は若干外上方にのび、体部との間にゆるい屈曲を示す。 *体部から底部にかけて丸味をおびるが、底面は扁平に近い。 	<ul style="list-style-type: none"> *体部は横ナデ。 *底部は全面にヘラ削りで調整。ヘラ削りの方向は、時計逆まわり。 *底部内面の中央に、同心円印き文が残る。 	<ul style="list-style-type: none"> *胎土は、細砂・石粒を含んで、不良。 *焼成もやや不良で、色調は灰黒色。 *玄室左袖部より出土。
8 环 (身)	A-6	<ul style="list-style-type: none"> *立ち上りは1.4cm、内傾し、端面は内側に向いて、浅く凹む。 *受部は水平にのび、先端は鋭く収める。 *受部先端から体部にかけて強く内傾し、底部は丸く収める。 *底部はやや扁平をなすが、これはどうしい歪みを生じている。 *立ち上り、および体部・底部の厚さはほとんど同じ。 *口径は 13.2cm。 	<ul style="list-style-type: none"> *外表は底部全面にヘラ削り、ヘラ削りの方向は、時計逆まわり。 *体部口縁部外表、および内面は横ナデ調整。 *底部内面の中央に、同心円印き文が半分ほど残る。 	<ul style="list-style-type: none"> *胎土は、細砂・石粒を多く含んで、甚だ粗悪。 *焼成は良。 *色調は、内面が灰青色、外表は自然釉が付着して黄緑色を呈す。 *南頭部北側より、[A'-6]蓋を重ねてまま出土。両者はセッタ関係。
8 环 (身)	A-7	<ul style="list-style-type: none"> *立ち上りは高く、1.9cm、内傾し、端面は内方に傾斜して、四線がめぐる状態を呈す。 *口径は、12.4cm。 *受部は水平にのび、重ねて焼成したさき付着した蓋の口縁部が欠けて残り、向井外方に自然釉もたまる。 *底部はやや扁平気味。 	<ul style="list-style-type: none"> *底部はほとんどヘラ削りで、粗く仕上げる。ヘラ削りの方向は、時計逆まわり。 *底部内面中央に、同心円の印き文痕が残る。 	<ul style="list-style-type: none"> *胎土は、細砂・石粒を含んで、不良。 *焼成は良。 *色調は、内部および外表の一部が灰青色、外表のほとんどは灰白色を呈す。 *玄室左袖部より出土。
8 环 (身)	A-8	<ul style="list-style-type: none"> *立ち上りは1.6cm、内傾し、端面は内方へ傾いて浅く凹む。 *口径 12.4cm。 *受部はほとんど水平にのび、先端は鋭い。 	<ul style="list-style-type: none"> *内面・体部外表は、丁寧に横ナデ、底部はヘラ削り。 *ヘラ削りの方向は、時計逆まわり。 	<ul style="list-style-type: none"> *胎土は石粒を含む。 *焼成は堅誠。 *色調は、灰黒色。 *玄室左袖部より出土。

器形	土器系	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴
		* 受部先端から体部にかけて、わずかに内側。体・底部は丸く接続するが、底面は、わずかに扁平。		
8	环 (身)	A-9 * 立ち上りは、受部から高さ 1.6 cm、内傾し、端面は内側を向き、わずかに凹む。 * 口径は 12.4 cm。 * 受部は外上方にのび、先端は鋸いが、体部へ丸味をおびて接続する。 * 体部と底部の間は、ゆるく内側し、底部は丸く收める。	* 底部外表の下半分はヘラ削りで、ヘラ削りの方向は、時計逆まわり。 * 内面は横ナゲで、仕上げナゲの痕がある。	* 胎土はわずかに小石粒を含む。 * 焼成は堅敏。 * 色調は灰青色。 * 玄室左袖部より出土。
8	环 (身)	A-10 * 立ち上りは、受部から 1.6 cm、内傾し、薄く、体部内面との接続は段をなす。 * 口径 12.8 cm。 * 受部は外上方にのび、先端は鋸い、立ち上りとの境に、V字状の溝をめぐらす。 * 受部先端から、体・底部にかけて、全体に丸くおさめるが、体部との接は、わずかに凹む。	* 体部は横ナゲで、底部は全体にヘラ削り、ヘラ削りの方向は時計逆まわり。 * 底部内面に、同心円の叩き文痕。	* 胎土は細砂・石粒を含む。 * 焼成は良。 * 色調は外表面の体・底部のりほど青黒色で、外表面の残りと内面は、淡い灰青色。 * 玄室内左袖部より出土。
8	环 (身)	A-11 * 立ち上りは、やや短かく、1.3 cm を測り、わずかに内傾し、端面は内側に傾んで、浅く凹む。 * 口径 13.3 cm。 * 受部は外上方にのび、端部の腹は、ややあらり、立ち上りとの境に V字状の溝をめぐらす。 * 底部は、ゆるく丸く收める。	* 底部全体の半分ほどヘラ削りで、仕上げは粗雑。 * ヘラ削りの方向は時計逆まわり。	* 胎土は、小石粒を含む。 * 焼成は堅敏。 * 色調は灰青色、体・底部に灰黒色の自然釉が付着。 * 玄室左袖部より出土。
8	环 (身)	A-12 * 立ち上りは高く、1.7 cm をこえ、内傾する。端面はなく、端部は鋸い。 * 口径 13.4 cm。 * 受部は細かく、ほぼ水平にのび、先端は丸味をおびる。立ち上りとの境に、淡い V 字溝がめぐらす。 * 受部先端から体部にかけて、周曲をなし、底部は丸く收める。	* 底部はヘラ削りで調整している。ヘラ削りの方向は不明。	* 胎土は粗悪で、細砂・石粒を含む。 * 焼成は良。 * 色調は一部灰青色が残るが、全体に色褪せて灰色を呈す。
8	环 (身)	A-13 * 立ち上りは高く、2.0 cm を測り、はじめ内傾し、中ほどから垂直気味に立ち上る。先端は丸い。 * 口径 12.9 cm。 * 受部はほとんど水平にのび、先端はやや鋸い。 * 受部先端から体部にかけてわずかに内側するが、体・底部は丸く收める。	* 底部は、全面ヘラ削り調整するが、粗雑に仕上げる。 * ヘラ削りの方向は時計逆まわり。	* 胎土は粗悪で、細砂・石粒を含む。 * 焼成は良。 * 色調は薄い灰青色を呈す。 * 玄室左袖部より出土。
8	环 (身)	A-14 * 立ち上りは高く、1.8 cm を測り、わずかに内側する。先端は鋸い。 * 口径 13.5 cm。 * 受部は外上方にのび、立ち上りとの境に V字状の溝がめぐらす。 * 受部先端から、体・底部にかけて丸く收める。	* 底部は全面ヘラ削りで調整するが、やや粗雑。 * ヘラ削りの方向は時計逆まわり。	* 胎土は粗悪。細砂・石粒を含む。 * 焼成は焼けひずみ。 * 色調は灰青色、受部上面の一部に緑色の自然釉が付着。 * 玄室内左側脇附近より出土。
8	环 (身)	A-15 * 立ち上りは 1.6 cm。内傾し、内面赤褐色とよく屈曲して接合。薄く、先端は鋸い。 * 口径 12.7 cm。 * 受部はほぼ水平にのび、先端は鋸い。立ち上りとの境に浅く V 字状の溝をめぐらす。	* 底部はほどほどヘラ削りで調整。 * そのさいの支え痕が底部内面に同心円の叩き文として残る。 * ヘラ削りの方向は時計逆まわり。	* 胎土不良で石粒を含む。 * 焼成は良。 * 色調は灰青色を呈す。 * 玄室左袖部より出土。

回数 15	器形	土器名	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴
			* 受部先端から体部にかけて内凹し、体部と底部は丸く連続、底部はやや扁平を示す。		
8	壺 (身)	A-16	* 立ち上りは薄く、高さは1.9cmで、やや内傾し、端面はない。 * 口径 12.5 cm。 * 受部は水平にのび、先端は鋭い。 焼成が悪い重ねた蓋の先端が一部破損している付着。立ち上りとの境に手揉みの跡がある。 * 受部先端から全体・底部にかけて、全体に丸く收める。 * 体部外方に、始めてきいの破損部や付着、蓋の留合に自然線の緑色のたまりがある。	* 内面および体部外表は横ナデ、底部はへラ削り。 へラ削りの方向は時計逆まわり。	* 脱土は粗悪で、細砂・石粒を混入。 * 烧成は良。 * 色調は、体・底部外表に墨白色の自然釉が付着。内面は灰紫色。 * 文室左袖部より出土。
8	壺 (身)	A-17	* 立ち上りは短く1.2cmを測り、底部内面と強く端面して接合。先端は鋭い。 * 口径 12.1 cm。 * 受部は短かく、外上方にのび、先端は丸く收める。	* 体部は横ナデ、底部はほどほどへラ削りで調整。 へラ削りの方向は時計逆まわり。	* 脱土は不良、石粒を含む。 * 烧成は良。 * 色調は、灰黒色。 * 埋没口部附近より出土。
8	壺 (身)	A-18	* 立ち上りは1.8cm、はじめ内腹部が著しく高いが、中ほどから外反する感じになる。体・底部に比べて、立ち上りの厚みは薄く、端部は鋭い。 * 口径 11.7 cm。 * 受部は短かく、外上方にのび、先端は丸く收める。 * 受部先端から体部にかけて、わずかに内側するが、体・底部は丸く接続し、底部は若干扁平。	* 底部半分ほどへラ削りで、残り体・底部は横ナデ調整。 へラ削りの方向は不分明。	* 脱土は精良。 * 烧成は良。 * 色調は灰黒色。 * 文室左側脇附近より出土。
8	壺 (身)	A-19	* 立ち上りは薄くて短かく、1.3cmを測り、端面しつつ若干内傾し、体部と底と段をして接合する。先端は鋭い。 * 口径 12.5 cm。 * 受部は短かく、水平にのびる。 * 底部は受部先端から全体に丸く仕上げる。	* 体部は横ナデ調整。底部は半分ほどへラ削りして、へラ切りの痕を明瞭に残す。 へラ削りの方向は逆時計まわり。	* 脱土は良。 * 烧成は良。 * 色調は内面が灰青色で、外表は淡い灰青色。 * 文室左袖部より出土。
8	壺 (蓋)	A'-1	* 天井部はなだらかに丸味をおびる。 * 天井部と口縁部は、あまい稜線によって区切られる。 * 口縁部はわずかに外方に開き、端部近くで外反する。 * 端面はゆるく内傾し、浅く凹む。	* 天井部はへラ削り。 へラ削りの方向は時計逆まわり。 * 内面に明瞭な粘土ひもの巻上げの痕がある。	* 脱土は不良。細砂・石粒を含む。 * 烧成は良好。 * 色調は薄い灰青色。 * 文室左袖部より【A-1】身と重なって出土。セットをなす。
8	壺 (蓋)	A'-2	* 天井部はあまくくらみがない。 * 天井部と口縁部とを分ける稜線はあまりなく、外方に突出しないが、別眼な凹痕がめぐる。 * 口縁部はほとんど垂直に近く、わずかに扁曲し、稜線から端部まで2.7cmを測る。 * 端面は内傾し浅く凹む。	* 天井部はへラ削りで調整。 へラ削りの方向は時計逆まわり。	* 脱土は不良で、石粒を含む。 * 烧成は堅板。 * 色調は、灰青色。 * 文室左袖部より出土。
8	壺 (蓋)	A'-3	* 天井部はなだらかに丸味をおびる。 * 天井部と口縁部とを分ける稜線は、わずかに突出する。 * 口縁部はやや外方に開き、稜線から端部まで2.2cmを測る。 * 端部は内傾する面を有し、浅い凹痕がある。	* 天井部はほどほどへラ削りで調整。 へラ削りの方向は時計逆まわり。	* 脱土は粗悪。 * 烧成は良好。 * 色調は薄い灰青色、小部分、灰黒色の自然釉が付着。 * 文室左袖部より出土。

回数 私	器形 (蓋)	土器版	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴
8	坪 (蓋)	A'—4	<ul style="list-style-type: none"> * 天井部は丸く取める。 * 天井部と口縁部とを分ける稜線はわずかに突出し、その下に深い凹線がある。 * 口縁部は外方に開き、稜線から端部まで2.4cmを測る。 * 端面は内傾し、浅く凹む。 	<ul style="list-style-type: none"> * 天井部はほどほどへら削りで調整。へら削りの方向は時計逆まわり。 	<ul style="list-style-type: none"> * 胎土は不良。石粒を含む。 * 焼成は堅版。 * 色調は全体に灰黒色。天井部の外表面に黑色の自然釉が付着。
8	坪 (蓋)	A'—5	<ul style="list-style-type: none"> * 天井部はなだらかに丸味をおびるが、へら切りが粗雑なため、凹みを残す。 * 天井部と口縁部は純い稜によって区切られる。 * 口縁部は外方に開き、稜線から端部まで2.0cmを測る。 * 端面は内傾して明瞭な凹線をめぐらす。 	<ul style="list-style-type: none"> * 天井部のほどほどへら削りで調整。方向は時計逆まわり。 * 天井部内面中央に、粘土ひも巻きあげの痕を残して、難な仕上げを示す。 	<ul style="list-style-type: none"> * 胎土は不良。石粒を含む。 * 焼成は良好。 * 色調は薄い灰青色。 * 宇室左袖部より出土。
8	坪 (蓋)	A'—6	<ul style="list-style-type: none"> * 天井部はなだらかな丸味をおびる。 * 天井部と口縁部を分ける稜線はわずかに突出する。 * 口縁部はわずかに外方に開き、稜線から端部まで2.1cmを測る。 * 端面は内傾し、浅く凹むが、一部端面をもたず、逆に丸味をおびて収める。 	<ul style="list-style-type: none"> * 天井部はほどほどへら削り。へら削りの方向は時計逆まわり。 	<ul style="list-style-type: none"> * 胎土は不良。石粒を含む。 * 焼成は堅版。 * 色調は、黄色がかった薄い灰青色。 * 前底部北側、地川の一層上から出土。 * [A—6]身とセットになっている。
8	坪 (蓋)	A'—7	<ul style="list-style-type: none"> * 天井部は丸く取めるが、へら削りでわずかに扁平をなす。 * 下方に広い凹線状に二周めぐらし、それを粗雑にへら削りしている。 * 天井部と口縁部とを分ける稜線はにぶく、ほとんど外方に突出しないが、軽度の凹線が外周して両者を限る。 * 口縁部は垂直に先端に至り、端面は内傾して、明瞭な凹線をめぐらす。 	<ul style="list-style-type: none"> * 天井部はほどほどへら削り。稜線が2本見られる。 * へら削りの方向は時計逆まわり。 	<ul style="list-style-type: none"> * 胎土精良。 * 焼成堅版。 * 色調は薄い灰青色。 * 宇室左袖部より出土。
8	坪 (蓋)	A'—8	<ul style="list-style-type: none"> * 天井部はあまりふくらみがない。 * 天井部と口縁部を分ける稜線はにぶく、ほとんど外方に突出しないが、明瞭な凹線をなす。 * 口縁部はわずかに外方にひらく、比較的均しく、稜線から端部まで2.7cmを測る。 * 端面は内傾し、凹線をめぐらす。 	<ul style="list-style-type: none"> * 天井部はほとんどへら削りであるが、調整は粗雑。 * へら削りの方向は時計逆まわり。 	<ul style="list-style-type: none"> * 胎土は粗悪。細砂・石粒を含む。 * 焼成は良好。 * 色調は灰黒色。 * 宇室左袖部より出土。
8	坪 (蓋)	A'—9	<ul style="list-style-type: none"> * 天井部はなだらかに丸味をおびる。 * 天井と口縁部は、外周する深い凹線によって分かれれる。 * 口縁部は星曲しつつ外方に開き、高さは2.3cmを測る。 * 端面は内傾し、わずかに凹む。 	<ul style="list-style-type: none"> * 天井部はほどほどへら削りで調整。へら削りの方向は、時計順まわり。 	<ul style="list-style-type: none"> * 胎土は不良。石粒を含む。 * 焼成は良好。 * 色調は薄い灰青色。 * 宇室左袖部より出土。 * [A—12]身とセットをなす。
8	坪 (蓋)	A'—10	<ul style="list-style-type: none"> * 天井部はなだらかに丸味をおびる。 * 天井部と口縁部は浅い凹線によってわずかに区切られる。 * LI縁部はわずかに外方に開き、端面は内傾して浅く凹む。 	<ul style="list-style-type: none"> * 天井部はほどほどへら削りで調整。へら切りはやや粗雑。 * へら削りの方向は、時計逆まわり。 	<ul style="list-style-type: none"> * 胎土は精良。 * 焼成は堅版。 * 色調は薄い灰青色。 * 宇室左袖部より出土。
8	坪 (蓋)	A'—11	<ul style="list-style-type: none"> * 天井部はなだらかに丸味をおびる。 * 天井部と口縁部との境界は、浅い不明瞭な凹線によってわずかに判別する。 	<ul style="list-style-type: none"> * 天井部はほどほどへら削りで調整。へら削りの方向は時計逆まわり。 	<ul style="list-style-type: none"> * 胎土は粗悪。細砂・石粒を含む。 * 焼成は良好。 * 色調は薄い灰青色。 * 宇室左袖部より出土。

図版 番	器形	土器名	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴
			* 口縁部はわずかに外方に開き、端部近くで外反する。 * 端部は内傾する面を有し、浅く凹む。		
8	环 (縁)	A'-12	* 天井部はなだらかに丸味をおびるが、中央部で凹みを生ずる。 * 天井部と口縁部の境界は四線によって区別される。 * 口縁部は外方に開き、端部は面をもたず、丸く収める。	* 天井部の先ほどへラ削りで調整。方向は時計逆まわり。	* 脱土は粗悪。細砂・石粒を含む。 * 烧成はやや甘い。 * 色調は薄い灰青色。 * 宇室左袖部より出土。
9	环 (縁)	A'-13	* 天井部はなだらかに丸味をおびるが、やや扁平を示す。 * 天井部と口縁部との境界は、浅い不明瞭な凹線によってわざかに判別される。 * 口縁部はほとんど垂直で、端面は内傾に浅く凹むが、先端はあるまい。	* 天井部は先ほどへラ削りで調整。方向は時計逆まわり。	* 脱土はやや不良。わずかに石粒を含む。 * 烧成は良好。 * 色調は薄い灰青色。 * 前底部より出土。
9	环 (縁)	A'-14	* 天井部は丸くふくらむ。 * 天井部と口縁部は外周する四線によって分けられる。そのすぐ上に螺旋状の深い凹線が2~3周する。 * 口縁部は垂直に近く、脛曲して端部に至り、高さは1.7cmを測る。 * 端面は内傾し、四線がめぐる。	* 天井部は先ほどへラ削りで調整。 * ヘラ切りは粗雑。 * ヘラ削りの方向は、時計逆まわり。	* 脱土は精良。 * 烧成は堅硬。 * 色調は薄い灰青色。 * 宇室左袖部より出土。
9	环 (縁)	A'-15	* 天井部は扁平をなす。 * 天井部と口縁部とを分ける四線は明瞭。 * 口縁部はほとんど垂直であるが、下段ではわずかに屈曲を示す。 * 端面は内傾し、端面と内・外両面とを分ける棱線は明瞭である。	* 天井部の先ほどへラ削りで調整するが、へラ切りは鋭。 * へラ削りの方向は、時計順まわり。 * 天井部内面中央に粘土ひもの残さぎ痕を残し、横アフ調整が不十分。	* 脱土は不良。石粒を含む。 * 烧成は堅硬。 * 色調は灰黒色。 * 宇室左袖部より出土。
9	环 (縁)	A'-16	* 天井部は丸く収めるが、やや扁平をなし、3段の棱をつくって、口縁部に至る。 * 天井部と口縁部を分ける棱線はあまく、四線がめぐって両者を限る。 * 口縁部はわずかに外方にひらき、棱線から端部まで2.1cmを測る。 * 端面は内傾し浅く凹む。	* 天井部の棱は、粘土のみ巻上げのまま生じたもので、脱より内部の粗面にへラ削りで調整している。 * へラ削りの方向は時計逆まわり。	* 脱土は不良。石粒を含む。 * 烧成は堅硬。 * 色調は灰青色。 * 宇室左袖部より川土。
9	环 (縁)	A'-17	* 天井部は丸くふくらむ。 * 天井部と口縁部を分ける棱は退化し、四線がめぐる。 * 口縁部はわずかに外方にひらき、端面は内傾し、鋭い。	* 天井部の先ほどへラ削りで丁寧に調整。 * 内面も丁寧に横ナギで仕上げる。 * へラ削りの方向は時計逆まわり。	* 脱土は精良。 * 烧成はやや生焼け。 * 色調は薄い灰青色。 * 宇室左袖部より出土。
9	环 (縁)	A'-18	* 天井部は丸くふくらむ。 * 天井部と口縁部は外周する四線によって分けられるが、そのすぐ上方にゆるいV字状の溝がめぐる。 * 口縁部はほとんど垂直をなし、高さは1.6cmを測る。 * 端面は内傾し、浅く凹む。	* 天井部は全面へラ削りで調整。 * へラ削りの方向は、時計逆まわり。	* 脱土は不良で、石粒を含む。 * 烧成は堅硬。重ね焼きのさいの破片が天井面に付着。 * 色調は灰黒色。 * 宇室左袖部より出土。 重ねられた土器のうち最下層にある。
9	高环 (無縁)	B-1	* 环部の口縁は短く、外反し、先端は鋭く収める。 * 口縁部と底部とを分けて、二段のつまみ出し突起。文様は一切ない。 * 脚柱部は短く、脚滑部は下方にのみ突出する。	* 环部の底はへラ削りしている。 * 环部内外両面ともナゲで丁寧に調整するが、穿孔部の外側に粘土のはみ出しが付着して、削りとされていない。	* 脱土は粗悪。細砂・石粒を含む。 * 烧成は良好。 * 色調は薄い青灰色。 * 宇室左袖部より出土。

段	器形	土器名	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴
			* 透しは三角形であるが、長方形への傾向を示し、3方にあけている。		
9	高环 (有蓋)	B-2	<ul style="list-style-type: none"> * 环部の立ち上りは、受部上面から1.1cmを測り、内傾し、端部は丸く取める。 * 受部は立ち上りとし、端にV字状の構造をもち、水平にのびて丸い先端に至る。 * 開口部中ほどに平行凹線があつて、長方透しを平面に限り、脚部部に凹線へつながる。 * 脚端部は端面の上下がのびて、わずかに後をなす。 * 器高 17.9 cm。 	<ul style="list-style-type: none"> * 环部・脚部とも丁寧に横ナデ調整。 * 空孔は十分でない部分もあり、粘土のはみ出しが内面に付着している。 	<ul style="list-style-type: none"> * 胎土は精良。 * 烧成は堅敏。 * 色調は薄い灰青色。 * 文室内中央部より出土。
9	高环 (有蓋)	B-3	<ul style="list-style-type: none"> * 环部は、立ち上がりが矮小化し、全体に浅く扁平。端面は内方に傾斜する。 * 受部は水平にのび、端部は丸く、先端から丸く底部に至る。 * 開口部に長方形二段透しが2方にあく。 * 脚部部はあまり張り出さず、端部に至る。 * 脚端部は下方にのみ突出する。 * 器高 16.8 cm。 	<ul style="list-style-type: none"> * 全面に横ナデ調整。 * 空孔部の粘土はみ出しが削りとされている。 	<ul style="list-style-type: none"> * 胎土は不良。細砂を含む。 * 烧成は生ま抜け。 * 色調は乳褐色。 * 文室内中央部より出土。
9	高环 (有蓋)	B-4	<ul style="list-style-type: none"> * 环部は、立ち上がりの傾斜度が甚だしく、受部は短く外方にのびて、端部は丸く取める。 * 受部先端から体部にかけてわざかに内傾し、丸く底部に至る。 * 脚部部は短く丸くの、長方形二段透しが2方にあく。 * 脚端部はわずかに回曲を示し、やや肥厚しつつ端部に至る。 * 器高 17.3 cm。 	<ul style="list-style-type: none"> * 环部の底はヘラ削り調整。 * 強りは环・脚部の内・外面とも丁寧に横ナデに仕上げる。 	<ul style="list-style-type: none"> * 胎土は精良。 * 烧成は堅敏。 * 色調は灰茶色。 * 文室内中央部附近より出土。
9	高环 (有蓋)	B-5	<ul style="list-style-type: none"> * 环部の立ち上りは矮小化し、端部は丸く取める。 * 受部は短かく、水平にのび、先端はあるまい。 * 受部先端と体部は、わずかに内側して接続し、底部はヘラ削りによって後をなす。 * 脚部は欠損するが、三方透しの痕が环部の底に残る。 	<ul style="list-style-type: none"> * 环部の底はヘラ削りで調整。 * ヘラ削りの方向は時計順まわり。 	<ul style="list-style-type: none"> * 胎土は良好。 * 烧成も良好。 * 色調は灰褐色。 * 前部より出土。
9	高环 (有蓋)	B-6	<ul style="list-style-type: none"> * 环部の立ち上りは著しく内傾し、受部はやや外方にのびて、先端はともに丸く取める。 * 受部先端から内側して体部に連なり、丸味をおびて底部に至る。 * 脚部は欠損。 	<ul style="list-style-type: none"> * 胎土の様りが十分でなく、ところどころ気泡を生じている。 	<ul style="list-style-type: none"> * 胎土不良。 * 烧成も不良。 * 色調は灰褐色。 * 前部より出土。 * 故意に破損したものか。
10	口頭蓋 (有蓋)	C-1	<ul style="list-style-type: none"> * 口縁部は短かく、垂直に立ち、上方はやや肥厚。先端は丸く取める。 * 体部は肩の張りがきつく、体・底部の境はわずかに内側する。 	<ul style="list-style-type: none"> * 体部はカキ目による調整。 * 底部はヘラ削りで、方向は時計順まわり。 	<ul style="list-style-type: none"> * 胎土は良。若干石粒を含む。 * 烧成良好。 * 色調は灰褐色。 * 文室内左袖部より出土。
10	壺 (直口)	D-1	<ul style="list-style-type: none"> * 口縁部はわずかに外反しつつ立ち上り、凹線2本がぐらりあたらからう方向を向いて、丸い端部に至る。 * 下の凹線と接して、波状文が施される。 * 体部は、肩部がやや張り出ますが、ほとんど丸く取める。 	<ul style="list-style-type: none"> * 口縁部・体部の内外面とも、横ナデ調整。 * 体部外表の一部がヘラ削り。 	<ul style="list-style-type: none"> * 胎土は良。わずかに石粒を含む。 * 烧成は堅敏。 * 色調は灰青色。 * 文室内左袖部より出土。

回数 編	器形	土器番	形態上の特徴	手法上の特徴	その他の特徴
9	壺 (広口)	E-1	* 口径 14.8 cm。 * 口頭部は橢圓形に外反し、端部は丸く、下方に突出がある。 * 体部は、器高に比して胴の製り出しが頗る。 * 体部と底部の接合部はわずかに凹む。 * 器高 18.2 cm。	* 外表は頸部・体部がカキ目調整。 * 内面は横ナデ。	* 脱土は良。わずかに石粒をまじえる。 * 焼成良好。 * 色調は灰青色。
9	壺 (広口)	E-2	* 口径 14.3 cm. 器高 20.8 cm. 体部最大径 18.7 cm. * 口頭部は外反しつつ立ち上り、口縁部は垂直の端面を有して、凹線をめぐらす。体部は肩の盛り方が頗るが、丸味をおびている。 * 器盤は全体に溝に溝に溝。	* 口頭部、体部はカキ目調整。底部は格子状の押き目。 * 体部はところどころ平行叩き目の痕跡がある。佐・底内部面は同心円状の叩き目。	* 脱土は不良。細砂を含む。 * 焼成良好。 * 色調は暗灰青色。 * 玄室内左袖部より出土。
10	提瓶	F-1	* 口頭部は欠損。 * 手の両側に環状の把手がつく。 * 体部は正円で、前面が丸くふくれているが、背面は扁平をなす。 * 体部最大径 21.9 cm。	* 体部前面は全体に細かくカキ目調整。	* 脱土は精良。 * 焼成は良好。 * 色調は前面右肩ほど白褐色、残余および背面は、自然釉が付着して薄い灰黒色。 * 玄室左袖部より出土。
10	提瓶	F-2	* 口径 8.2 cm. 器高 24.4 cm. 体部最大径 18.8 cm. * 口頭部はラップ状に立ち上り、背部は短く垂直に立つ。 * 肩部両側の把手は環状であるが、左方が欠損。 * 体部は正円で、前面がふくれ、背面も張り出すが、丸味は均齊でない。	* 体部前面中央に平行叩き目を残すが、その周囲はカキ目調整。 * 背面も同様。 * 体部をめぐる肩部の円周線上は、体部に穿孔して口頭部を接合したあとのカキ目調整。	* 脱土は粗悪。細砂・石粒を含む。 * 焼成は良好。 * 色調は背部前面は灰青色、背面および口頭部は灰褐色。 * 玄室内袖部より出土。
10	提瓶	F-3	* 体部最大径 15.3 cm. * 口頭部は欠損。 * 肩部両側の把手は環状をなすが、左方は欠損。 * 体部は前面が丸くふくれて、背面もわずかに張り出す。	* 体部の前・背両面とも回転を利用してカキ目調整。	* 脱土は良。わずかに石粒を含む。 * 焼成は良好。 * 色調は灰青色。 * 玄室中央部の左側より出土。その傍に、「B-2」高杯。
10	土器巻壺	G-1	* 口径 9.9 cm. 器高 13.7 cm. * 口頭部は体部から直立気味にのびるが、口頭部の境目でらいからわざかに外反し、口端では心持ら内向気味に立ち上る。 * 体部は球状で、丸底。	* 口頭部は横ナデ。体部は全面、丁寧な刷毛目調整。 * 内面は、口頭部が刷毛目と横ナデ。	* 脱土は精良。 * 焼成は良好。 * 色調は赤褐色。 * 玄室内左袖部より出土。

4. 結 語

今回の発掘調査によって、四郷崎古墳は、横穴式石室を主体とする中型の円墳であることが明らかとなった。基底部の径約 18 m のほぼ中央に、3 × 2.3 m の横長の玄室が構築され、玄室前壁の左寄りに長さ 2 m の羨道が西向きに開口して取りつけられていた。調査に先立って墳頂部に陥没がみられたため、当初は木棺直葬墳と推測されていたのであるが、発掘の結果、その陥没は天井石がつとに除去され、マウンドの土砂が石室内に埋まって生じたものと判明したのである。各側壁は磨石をヨコ積みし、隙間に砾石を充填するといった方式で石室全体が構築されていた。玄室内には全面割石の小片が敷きつめられていたが、玄室床面と羨道部の境が段をなし、玄室床面より約 10 cm 高く羨道底面が設けられていた。副葬品としては、須恵器 50 個、土師器 1 個、鉄製刀子 1

口、鉄鎌 60 点、管玉 3 顆が出土した。また腐朽直前の状態ではあるが、人骨一体分が検出された点、特に注目すべきことと思われる。

四郷崎古墳の築造年代に関しては最大の決め手となるのは、玄室内（若干前庭部）から出土した 50 個の須恵器資料である。坏・蓋の推移および器形の消長を中心としてその須恵器を検討した結果、50 個の須恵器は 3 群に分類され、その 3 群はそれぞれ 6 世纪前半、6 世纪中頃、6 世纪後半の 3 期に比定されるという結論が得られたのである。したがって当古墳は、6 世纪前半に築造されて第 1 次の埋葬が行われ、その後間隔をおいて第 2 次・第 3 次の埋葬が行われたことになる。

6 世纪前半といえば、5 世纪後半、畿内的一部地域に出現していた横穴式石室が、内部構造として次第に各地に普及してゆく時期に当る。湖北においてもその時期、息長氏系の首長墓と目される近江町の山津照神社古墳が横穴式石室を採用し、構造上の制約から、後円部を相対的に小さくするのに対し、前方部をより大きく築造する後 I 期に典型的な小型の前方後円墳を成立させているのである。これとは異なって四郷崎古墳は、前述のごとく中型の円墳であるが、6 世纪前半、横穴式石室を早々に採用したという点では、山津照神社古墳に似ている。おそらく湖北町周辺における最も早期の横穴式石室をともなう古墳とみて誤りはあるまい。たとえば、当古墳が位置する虎御前山北東端とは指呼の間にある小谷山につづく雲雀山の尾根上に点々と連なる雲雀山古墳群を例にとってみよう。雲雀山古墳群は 8 基よりなり、そのうち調査されたのは山頂にある第 1 号墳以下、北下りの尾根上に列ぶ第 2 ・ 第 3 号墳である。3 古墳のうち最も年代の先行する第 1 号墳は、一種の祭祀遺跡ではないかと想像されているが、第 2 号墳は竪穴式石室を主体とする円墳で、5 世纪末葉より 6 世纪初頭にかけての一時期に築造されたものとみなされている。^⑨ すなわち雲雀山第 2 号墳が、調査者も推測されているように、竪穴式石室の表顕期に築かれたものとすれば、6 世纪前半の築造にかかる四郷崎古墳は、この地域における横穴式石室の初現とみなすことができるのである。

周知のように、横穴式石室の採用は、石室そのものを死後の生活を営む場とみる観念の発生を促す要因ともなった。その変化は各種装身具や馬具、須恵器などの日用品が副葬品として選ばれる点に端的に表われている。四郷崎古墳の副葬品も、そうした一般的の傾向を反映するものであったことはいうまでもない。これに対して先に紹介した雲雀山第 2 号墳のばあい、副葬品は変形獸文鏡や玉類、鉄製の武器・武具類、農具類などであって、顯著な対照を示しているのである。それらの副葬品が被葬者の呪術的・権力的な性格の如実な反映であることについては贅言を要しない。雲雀山古墳群の被葬者が代々、その保持する宗教的・政治的な権能によって近隣を統べた首長であったことは容易に想像されよう。ただ山頂の第 1 号墳が特殊な祭祀遺跡であったとすれば、その祭祀を司ったのは当然その首長であったとみられるが、第 2 号墳の副葬品として獸文鏡や玉類のほかに鉄製の武器・武具類を含んでいるのは、首長の性格が呪術・宗教的なものからより露骨な権力的なものに変化はじめめる反映ともみられるのであり、鉄製の農具も首長による私的独占を意味しているのかもしれない。ともかく雲雀山第 2 号墳の呪術的・権力的な性格に対して、四郷崎古墳の日常的な性格はきわだった相異を示しているといえよう。

しかしながら四郷崎古墳は、虎御前山の北東尾根に連なる四郷崎古墳群のうちの第 4 号墳に当る。その第 1 号墳は最高所に築かれた前方後円墳であって、以下 3 基の円墳が下方に列んでいるのであるが、これらは数世代にわたって系譜的な関係にある首長墓であると思われる。前述のごとく四郷崎第 4 号墳は、6 世纪前半以降、間隔

をおいて3次に及ぶ埋葬がなされていた。この例によって単純計算すると、四郷崎古墳群は5世紀中頃の前方後円墳を最初として、以下3世代にわたって築造されたことになる。おそらく四郷崎古墳群の被葬者も、雲雀山古墳群のばあいと同様、同一家系に属する首長として、代々虎御前山の周辺に勢威をふるったものと思われる。第4号墳の副葬品が決して権力者的なものではなく、むしろ日常的な性格の濃厚なことは、その被葬者が首長としての権力を失墜したことを必ずしも意味しない。6世紀の前半以後、次々埋葬された3代の被葬者も在地の有力者として依然として勢威を保持していたであろう。6世紀前半以降、爆発的に発生する群集墳が湖北地方では認められず、点々と個別的に、あるいは小群が分散的に分布するのみで、古墳を築造しうる階層はなお限られていたと思われるからである。第4号墳のいわゆる日常的な性格は、横穴式石室の採用を契機として、埋葬ごとに新たな古墳を築く必要がなくなり、同一墳への追葬が可能になったところから、古墳が家族墓的に変容したことの一現象と解されよう。しかし单次葬の墓制から古墳が複次葬の家族墓へと変化したことは、一方で、古墳祭祀の主体が従来の共同体から個々の家族に移行するといったいわゆる家族の自立性の強化を背景にもつものであった。首長以外の家系にあっても、新たに共同体に抬頭てくる有力家族が、6世紀に入って個別に家族墓を営みはじめるのである。

虎御前山には、四郷崎古墳群と同じく、首長系贈の墳墓とみられる前方後円墳1基・円墳3基よりなる飯塚山古墳群が築かれているが、このほか各尾根上には数基よりなる円墳の小グループが、いくつか分散的に築造されている。それらはいわば互いに並列的な関係にある小古墳群であるが、その被葬者が各集落内における有力家父長層であったことはいうまでもない。虎御前山の周辺にあっても、従来の首長以外の有力家族が新たに造墓の主体として登場てくるのである。

すなわち四郷崎第4号墳の意義は、5世紀代における首長墓としての单次葬の墓制から、横穴式石室の採用をひとつの契機として、6世紀以降、首長以外の有力家族の営む複次葬の後期古墳へと変遷してゆくさいの変革の役割りを担った点に求められるであろう。

(谷口 義介)

注

① 大塚初重「古墳の変遷」(『日本の考古学』N, 古墳時代上, 1966年)。

② 直木孝次郎・藤原光輝「雲雀山古墳調査報告」(『大阪市立大学文学部歴史学教室紀要』1—1, 1953年)。

第3章 丁野遺跡

1. 調査経過

丁野遺跡は、丁野山の南西尾根が山脇山に向かって下降してゆく山腹の地点に立地する。この尾根上には、最高所にある前方後円墳を主墳として、以下12基の円墳が築造され、丁野岡山古墳群の名が与えられている。そして尾根上に点々と列ぶ丁野岡山古墳群のうちの末尾に達する第12号墳が、今回の発掘調査の当初の対象とされたのである。

調査区域の現況の平板測量を開始したのは、1974年7月9日であった。10cmコンタによる平板測量の結果、墳丘の形は一向現われず、この段階ですでに丁野岡山古墳群第12号墳の存在には疑問がもたれた。ともかく現況の写真撮影が終わり、断面観察用のL字型の鍔を2つ残して、掘り下げを開始した。つまり、調査区域に若干かかる第11号墳を基点にして、尾根に沿って南西方向にL字の長軸を合わせ、それに尻をつける形でもう1つのL字鍔を設けたので、結果として、A区・B区・C区・D区の4区域を設定することになった。

はじめ全区域にわたって腐葉土の除去からとりかかった。A・B両区は第11号墳の墳化を一部含んでいるが、墳裾を掘り下げるに、A区では表土下20cmで岩盤に当たり、B区東南隅では、茶褐色粘土層より須恵器片・土師器片の出土をみた。またA・C両区の境の暗褐色含礫粘土層より、須恵器縁の破片が検出された。この縁の鈴部には波状文が施されていて、6世紀前半代のものとみられ、11号墳他の丁野岡山古墳群の築造時期のものと考えられた。

C区においては東隅から掘り下げを始め、含礫褐色粘土層より打製石器1点と若干の上部器片を検出し表土下30cmで石灰質の白色粘土層に達したが、C区西半にあっては、黒色腐植土層や茶褐色粘土層などが広がり、複雑な様相を呈していた。D区では、C区東隅と同じく表土下30cmで石灰質の白色粘土層が現われ、封土の痕跡は依然として認められず、この時点で第12号墳の存在はほとんど否定的になった。そして念のため、D区西辺に幅80cmのトレンチを註に沿って掘り下げてみた結果、地層は尾根の下降するままに南西方向に流れて盛り土された様子はみられず、ここにいわゆる第12号墳ははじめから存在しなかったという結論に達したわけである。

ついでA・C両区間の註に沿ってトレンチを掘り下げたところ、表土下30cmで、125×60cmの土壤を発見し、これに続いてC区で2個、D区で2個の長方形の土壤を検出した。またD区では、地山と思われる白色石灰質粘土層を掘り込んで幅約50cmの溝が見出された。この溝の北端はB区に達り、D区の中央で西に屈曲して、さらにC区に流れる様子を示していた。その溝の屈曲部の東に隣接して、径60cmの炭のつまつたビットを検出、周囲には鉄滓が散布していた点から、製鉄炉跡と推定された。また周囲に須恵器片も散布していたが、中に高台付の环がある、8世紀代のものと認められたので、製鉄炉と関連づけうるとすれば、この製鉄遺跡はその時期に比定することができるであろう。

C区西南隅は依然として複雑な地層の状態を呈していたが、茶褐色粘土層・黒色腐植土層を掘り下げるに、白色石灰質粘土層の地山が露出はじめ、多数の赤生土器片が出土した。ついで、C区南端に検出されたM-2内

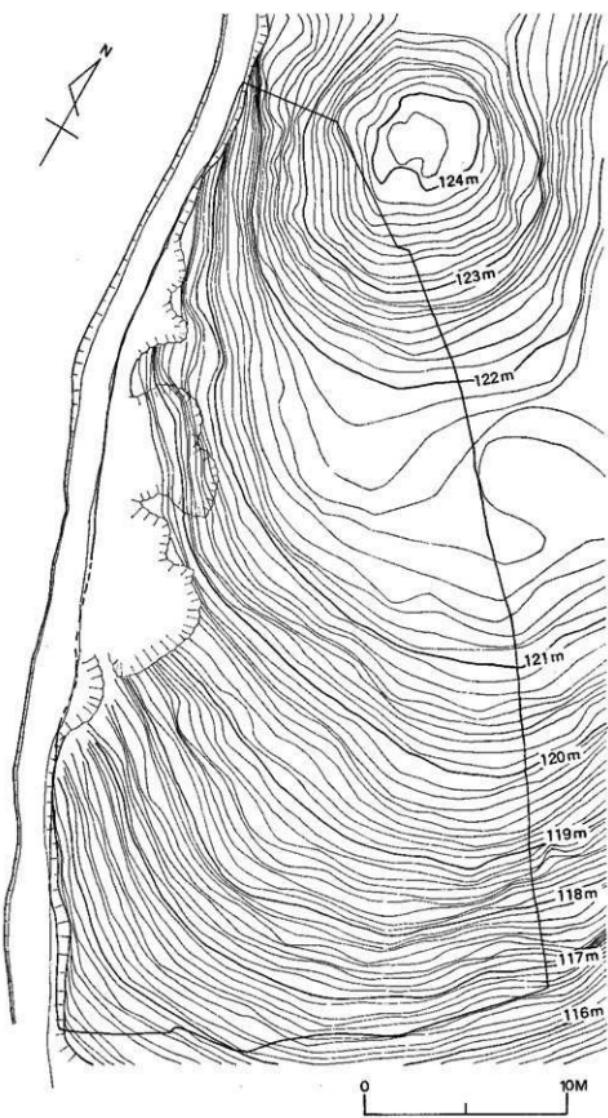


图13 丁野遗址地形测量图

溝底より壺形土器2点が完形のまま出土したが、これはその出土状態よりしてM-2溝内に埋置されたものと推測された。一方、A区北側、つまり第11号墳の墳頂に近く、径60cmほどの炭の円状分布があり、1個体に近い土器片が検出された点も注目されよう。

上記のようにC区西辺は、人工的に溝を掘削して壺形土器を埋置するなど、極めて問題視された点から、しばらくはこの区域を重点的に調査した。その結果、土壙や方形周溝造構と予想される溝状造構を検出したのである。これらの土壙内には黄褐色粘土層がつまり、地山（白色石灰質粘土層）と判別が困難だったため、この点に留意しつつ全区域にわたって再点検を試み、注意ぶかく掘り下げを行った。そしてさらに10数個の土壙を検出したが、特に注目されるのは、B区において土壙が半分第11号墳の墳頂下にもぐっていることと、D区にあって前述の溝がこの時点で発見された4個の土壙を破壊するように掘られていた点である。

以上のような点から、C・D両区の西南方向にさらに調査区域を拡大する必要を感じられたので、予定を延長して、新たにE・F両区を設定し、発掘を繼續した。その結果、E・F両区においても11個の土壙墓を検出し、それらの土壙群の中心に1基の方形台状墓と推定可能な方形造構を発見したのである。この方形造構は前述の方形周溝を北・東両辺にともなうもので、南・西南辺は丘尾を切断する形を示していた。またこの造構が方形台状墓などの性格も推定されるため、台状部と推測される区域にL字状の2つの柱を残して掘り下げたが、ほぼ中央に長方形の土壙を見出した。さらにこの方形造構の南部下方に径50cmの施肥土と柱穴状ピットを検出したが、これらの造構は上述した方形造構に伴う祭祀的造構とも想定された。方形造構を中心として、C区南端のM-2から出土した前記壺形七器を再検討してみると、それがこの造構に伴った土器であろうとする想定もでき、事実C区西南隅の半円すり鉢状の掘り込みからは別の壺形土器も出土したのである。またC区において、上中下三段の段状掘り込みが検出され、前述した土壙墓等の墓域を限る造構とも想定されたが、土壙墓C-6を削平している事實からして、土壙墓群より後代の造構と考えられた。

一方、調査区域に今ほどかかる第11号墳については、表土下50cm掘り下げ、黒色腐植土層の長方形の一辺を発見したが、これは掘り方とみられ、第11号墳は木棺直葬場であろうとの推測をつよく懷いたのであった。

当遺跡は、当初丁野岡山古墳群の第12号墳とみされていたが、上述のごとくその古墳は初めから存在しないことが確認された。その代り、弥生末期から古墳時代初期にかけてのものとみられる集団墓地が発見されたのであった。その間2度にわたる積石もあって調査は大幅に長期化し、最終的に調査を終了したのは、1975年4月初旬のことである。

（谷口 義介）

2. 遺構 (図14)

丁野遺跡の各造構は標高120m前後の尾根上及びその西側斜面・南側斜面に位置し、一部の造構を除いて、すべて地山である白色石灰質粘土層上に造存していたものである。今回の発掘調査で検出した造構は土壙墓34基、方形造構、製鉄炉、焼土壙、溝状造構であり、弥生時代後期から奈良時代前期までにわたる時期の造構であった。

(1) 土壙墓

34基の土壙墓はA区からF区まで全区で検出された。その規模や主軸方向などは大別して2種類に区別され、數基単位の群をなすものと単独に存在するものとの差異があった。なお、遺骸・内部敷設・副葬品を伴った土壙

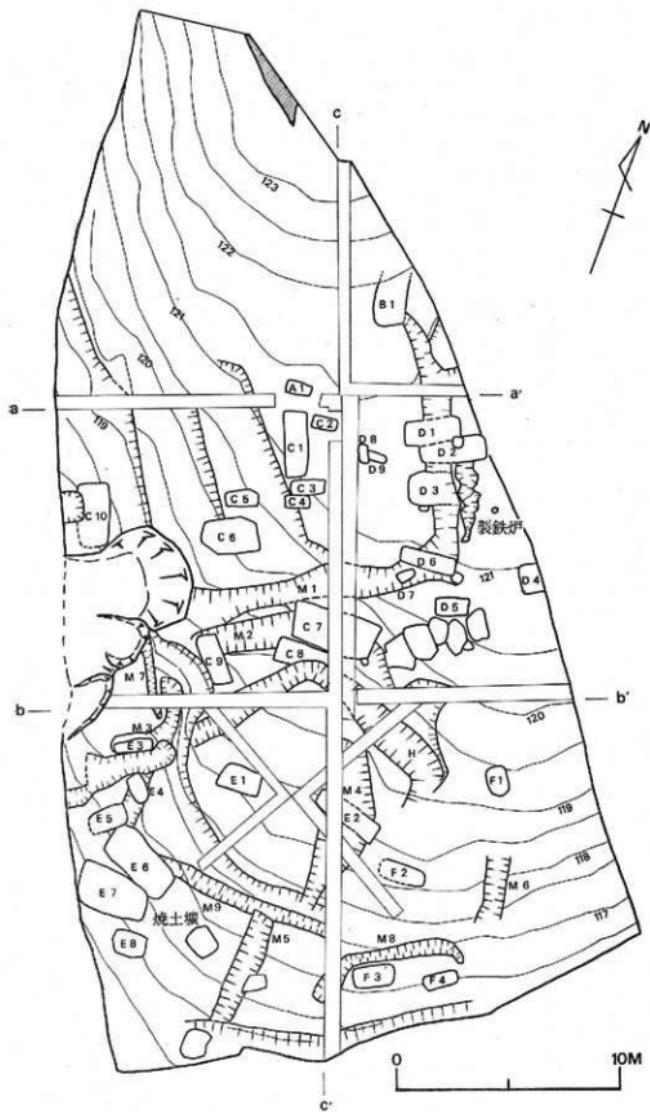


図14 丁野遺跡遺構全図

墓は皆無であった。以下、群として把握できる土墳墓から説明しよう。

第1群 (D-1、D-2、D-3) (図15)

尾根上の平坦部に3基からなる土墳群である。いずれも中央部あるいは東部を溝状造構M-1に削除されている。D-1・D-2はともに幅1.2m、長さ2.6m~3mを測る同規模のものであるのに対し、D-3は幅1.5m

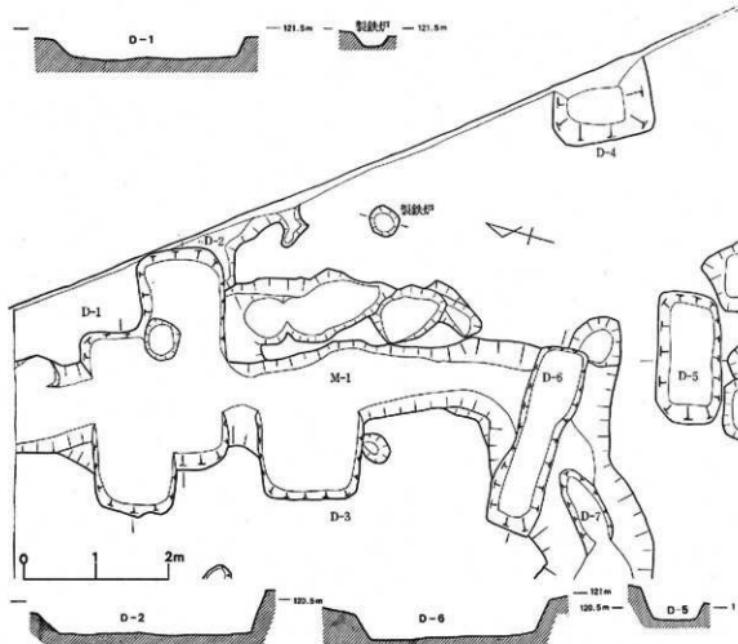


図15 丁野遺跡D区土墳墓・溝状造構(M-1)実測図

を測るもの、長さは2m前後の短いものと推測される。3基ともM-1削平部を除いて、境内には黄褐色石灰質粘土一層のみが充填されていた。なお、D-1とD-2は側辺を切合っており、時期的に前後するものと考えられる。またD-1の南東角とD-3の南西角の肩部に径40~50cmの円形ピットが穿たれている。特にD-1のピットは深さ60cm余り、地山に深く食いこんでおり、墓標等の地上設置が考えられる。主軸方向は3基とも、ほぼ東西にとっている。

第2群 (D-5・D-6・D-7) (図15)

第1群の南に3基からなる土墳墓群である。この3基の他に、発掘区域外に伸びるD-4も同群にいれるべきものとも思われる。このうちD-6は東西の両端が僅かに遺存しているのみで、中央部はM-1の削平を受け、遺存状況は不良であった。なお、南東角に約80cmの方形ピットが穿孔されている。D-7はM-1の溝底よりかろうじて検出されたもので、ほとんど旧状をとどめなかった。

第3群 (A-1・C-1・C-2・C-3・C-4・D-8・D-9)

C区の尾根上平坦部付近に集まる土墳墓群であるが、C-1をのぞいてすべて深さ10~20cm前後で浅く、規模もひとまわり小さいものである。特にC-4はその西部が、西側斜面の段状掘り込み遺構堆積土層上より検出され

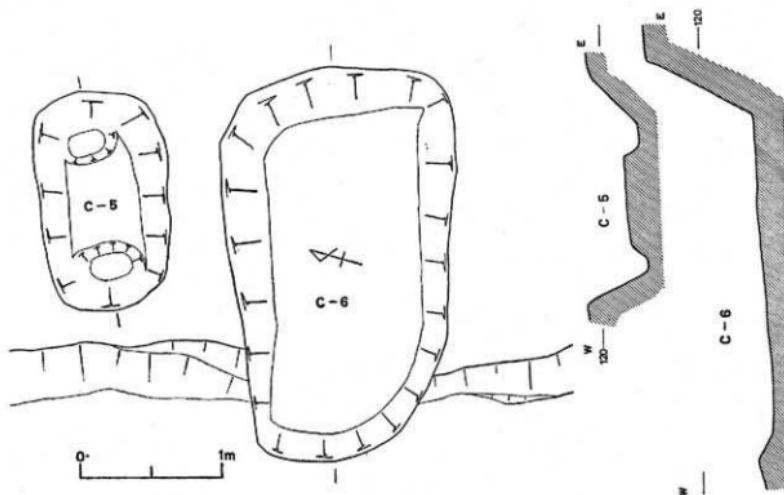


図16 丁野遺跡C区土墳墓 (C-5, C-6) 実測図

ており、当遺跡の他の土墳墓とは時期を異にした、後代の土墳と考えられる。これに対して、C-1は1.4m×3m、深さ0.8mの土墳墓で、主軸は南北方向にとっている。墳内埋土上層より、土器底部片が出土したが、混入物と見られる。

第4群 (C-7・C-8) (図17)

南部斜面上、C・D区にまたがって検出された2基からなる土墳墓群である。10cm余りをへだてて両土墳墓は全く平行して掘りこまれており、被葬者間の密接の関係が明瞭である。C-7は1.9m×4m・深さ1.2mの墓壇をもつ、当遺跡の土墳墓中最大の規模のものである。C-8は中央トレンチで消失した東端を考えると、1.2m×3m前後のC-7に比べ、ひとまわり小規模なものである。南部側辺を後述する方形遺構の周溝に削りとらわれている。また両基とも上部をM-2に削除されていた。なお、C-7は中央駐断面(図23C-C')で明らかのように、木棺の腐朽がもたらした落ちこみと考えられる黒色腐植土が幅40cm、長さ2m前後にわたって検出された。

第5群 (C-5・C-6) (図16)

C区西側斜面に位置する、東西に主軸方向を持つ2基の土墳群である。第4群同様、両土墳墓は80cmをへだてて平行しており、両被葬者の関係を如実に示している。C-5は0.9m×1.5mの規模、深さ30cmを測り、どちらかと言えば小型の土墳墓である。墳底の東西両端に深さ15cmの掘りこみが見られた。これは墓壇内いっぱいに設けられたと推定される組合式箱型木棺の小口板を墳底にめこむための掘りこみ痕と考えられる。なお、

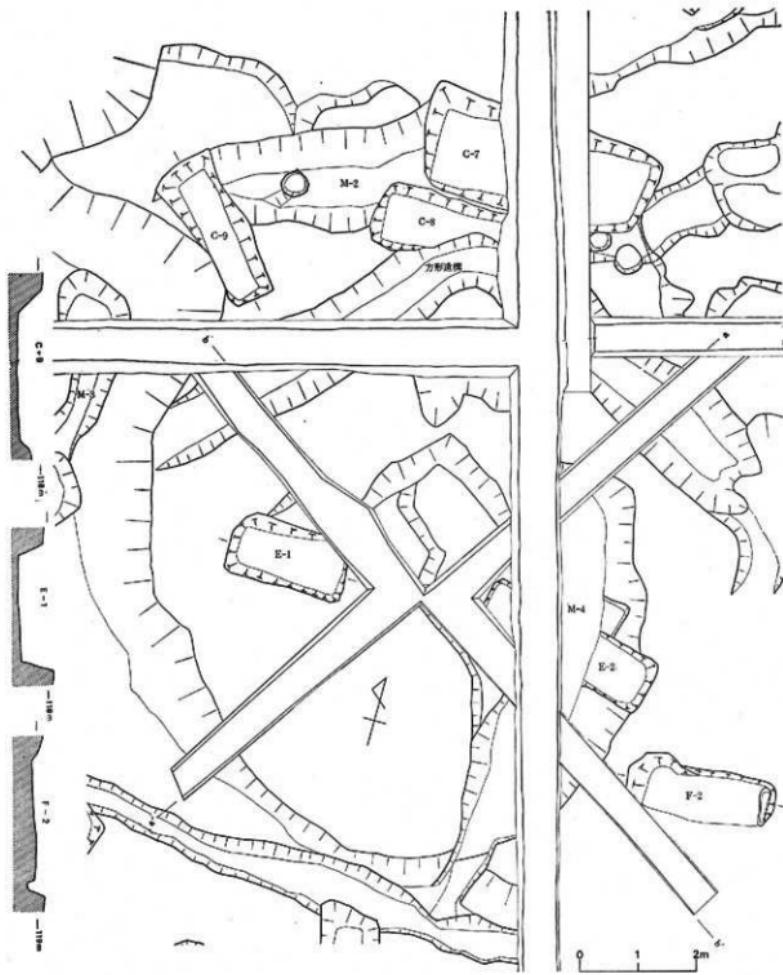


図17 丁野遺跡方形連構、C・D・E・F区土壙墓、溝状連構実測図

側板に伴った掘りこみは見られなかった。D-6は約1.6m×2.8mのC-5よりはるかに大きいものであるが、C-5に見られた木棺設置痕は検出されなかった。ただ、境内掘下げの過程で幅0.6m・長さ1.6mの黒色腐植土層が主軸に平行して検出された。これも木棺の落ちこみに伴うものと考えられる。したがって当土壙墓にも相当大きな組合式箱型木棺が墓壙内中央に設置されていたものと想定されるが、小口板を壙底にはめこむことはなかったと考えられる。なお、両基とも上部を後代の階段状掘込みにより削平されており、C-6の西端は深さ5cm

しか遺存していなかった。

第6群 (E-3～E-8) (図18)

E区西端に6基よりなる土壇墓群である。本遺跡土壇墓中もっとも低所に設けられており、本土壇墓群のすぐ東に比高差1m余りの方形遺構南辺を見る。6基の土壇墓のうち、E-3とE-5、E-4とE-6、E-7とE-8

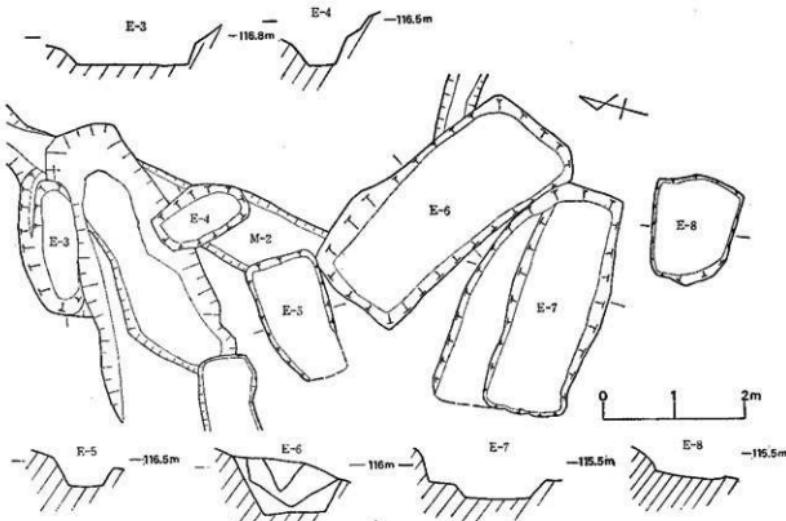


図18 丁野遺跡 E区土壇墓 (E 3～8)・溝状遺構 (M 3) 施測図

は各々主軸方向を共通にし、2基を一単位とする三組の土壇墓群から形成されていると推定した。これらの三組の土壇墓群は大型のものと比較的小型のものとの対としてとらえられ、第4群・第5群と同様の構成からなるようである。とくにE-7は2m×3.4mを測る大型なものであるが、北側側辺は階段状に二段掘りが行なわれている。E-3～E-6の各土壇墓は、上部を溝状遺構M-3に削平されている。

第7群 (F-3・F-4) (図19)

F区南端の2基よりなる土壇墓群である。急斜面を削り落して東西約6mにわたる平坦地を造成、2基を東西一直線上に並べて營造したもので、墓域に規定された配置をとる。なお、先に述べた平坦地造成の際に掘りこまれたものか、両墓壇の北側に墓域を明確に示す溝状遺構が東西方向へ伸びている。また、木棺落ちこみ痕などは見られなかったが、F-3上面に河原石が一部列状に検出された。

以上、7群を数える土壇墓の他に、単独に位置するものがある。E-1は方形遺構内区中に掘りこまれているが、方形遺構の主軸と方位が一致しないこと、方形遺構の中央付近からはずれていることを考慮するならば、方形遺構築成時に伴って設けられた土壇墓とは考えられない。これはE-2についても同様であり、いずれも方形遺構築成以前の土壇墓と考えられる。F-2も単独墓と推定したが、ほぼ同一コンタ上のE-2と単位をなすものとも考えられる。東端に、組合式箱型木棺埋置を示す、掘りこみが東壁わきに検出された。

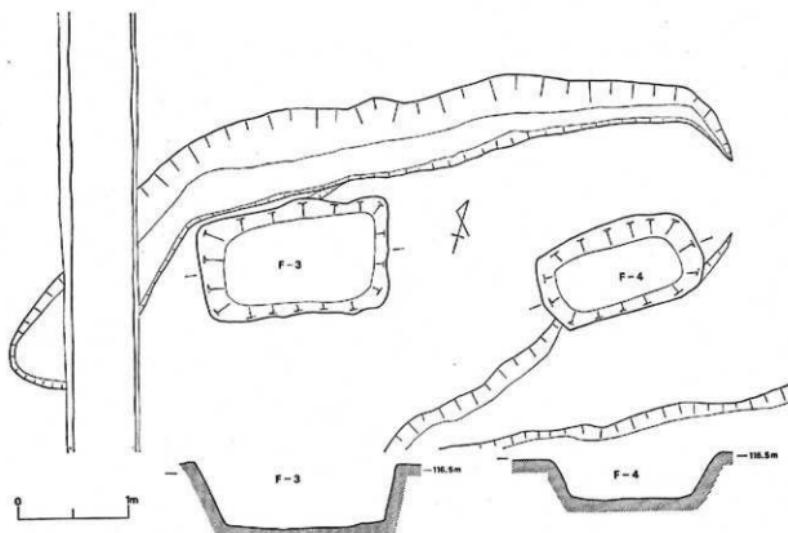


図19 丁野遺跡F区土塚墓(F-3, F-4)実測図

さて、以上の当遺跡の土塚墓は、C-7・C-8両墓が方形遺構及び弥生終末期ないしは古墳時代初頭に編年される壺を出土したM-2に切られている点から、弥生後期の土塚墓と判断できるが、副葬品を内蔵したものが一例も見えず、各土塚墓間の身分的格差は顕著ではなかったと思われる。また、本遺跡の土塚墓群は大小の土塚墓によって構成されているものが中には見受けられたが、これは同一家族内の性別及び年齢差を示すものと判断されるのである。

(2) 方形遺構(H) (図17)

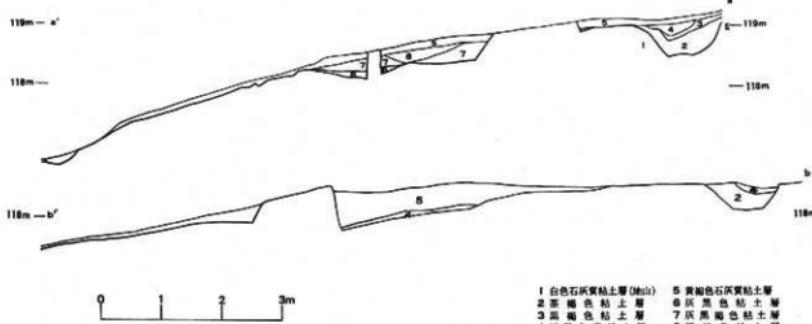


図20 丁野遺跡方形遺構断面実測図(図17対照)

E・F区にまたがる緩傾斜面に築造された、一辺 6.5 m～8 m の方形遺構である。すなわち、北辺及び西辺は幅 1.2 m～1.8 m・深さ 0.4 m～0.5 m の溝を掘りこんで方形に区画したのに対して、南辺は高所から低所へ原地形を削り落しただけの粗雑な区画で、等高線に沿って弧状に形成されている。南側の土墳墓の存在する緩傾斜面との比高差は約 1 m に及び、結果として 1 m 以上の台状部が築成されているものと考えられる。また、東辺には僅かに北辺からつづくコーナー部が検出されたが、この他には溝も削り出し台状部もみられなかった。なお、西辺に連続するとみられる溝状遺構が E-3、E-4 の間を貫通しているが、約 1 m の比高差からして、西辺の溝の連続とは考えられず、後代の掘りこみと一応推定した。

さて、上述の方形遺構は周辺に存在する土墳墓を切っており、土墳墓より後代の遺構と予想されるが、方形区画内及び周溝からは、なんらの時期決定を行いうる遺物を見なかたため、その時期と遺構の性格が不明瞭であるが、高地性集落とか他の高地性遺跡に伴う遺構が全くみられず、弥生時代後期の墓地跡と考えられる場所に繼起的に築造されている点からして、弥生末から古墳時代初頭頃の方形台状墓と考えることも可能と思われる。この解釈を有力づける遺構として、方形遺構の北から西へ走る溝状遺構（M-2）が上げられる。

(3) 溝状遺構

本遺跡で検出された溝状遺構は 9 条を数えるが、二、三のものをのぞいて、土墳墓や方形遺構を切って掘りこ

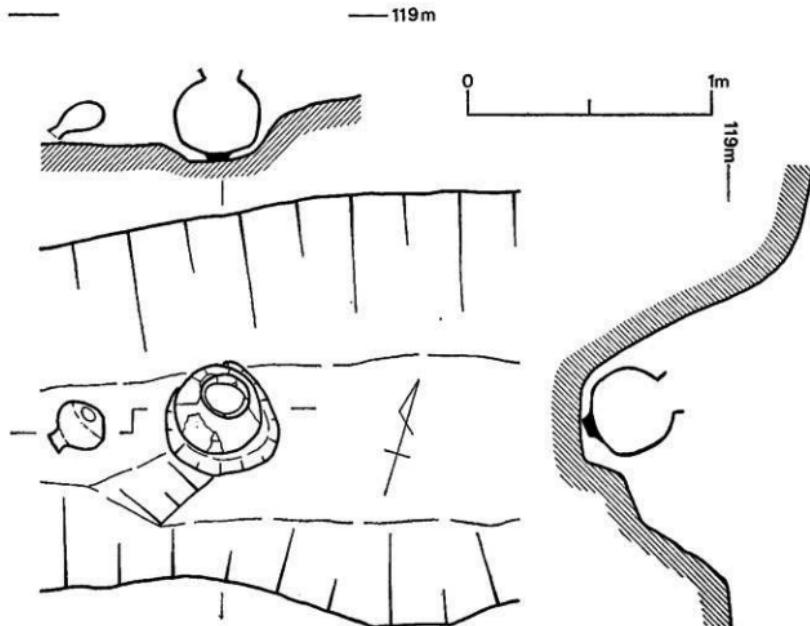


図21 丁野遺跡M-2内土器出土状態実測図

まれており、後代の遺構の様相を示すが、各溝とも4世紀後半以降には下らないものと考えられる。まず、前項に開拓してM-2より説明を加えよう。

M-2 当溝は方形遺構の北側に、ほぼ一直線に東西方向に掘りこまれた最大幅1.8m・深さ0.7m余のV字溝である。西端部の溝底より壺形土器2点を出土したが、特に大型の壺(図21)は溝底に穿たれた径45cm深さ20cmの小窪にえつけられたもので、一見して供獻された遺物と判明した。したがって、当溝はこの土器を供獻するために掘りこまれた、祭祀に関わる空掘り溝と考えられ、その時期も供獻土器から4世紀を下ることはないと推定した。なお、溝内には黄褐色石灰質粘土と黒色腐植土が堆積していたが、比較的早い時期に黄褐色石灰質粘土が流れ込み、ほぼ当溝は埋没、その後(8世紀前葉頃)、黒色腐植土が僅かな凹所に流入して完全に埋ったものと解せられる。

ところで、先に述べた供獻土器は、C-8、C-9等の土墳墓を切っている溝状遺構M-2内の出土遺物である点から、これら土墳墓の被葬者に伴うものでないことは明らかであり、すぐ南に築成された方形遺構に伴う遺物と

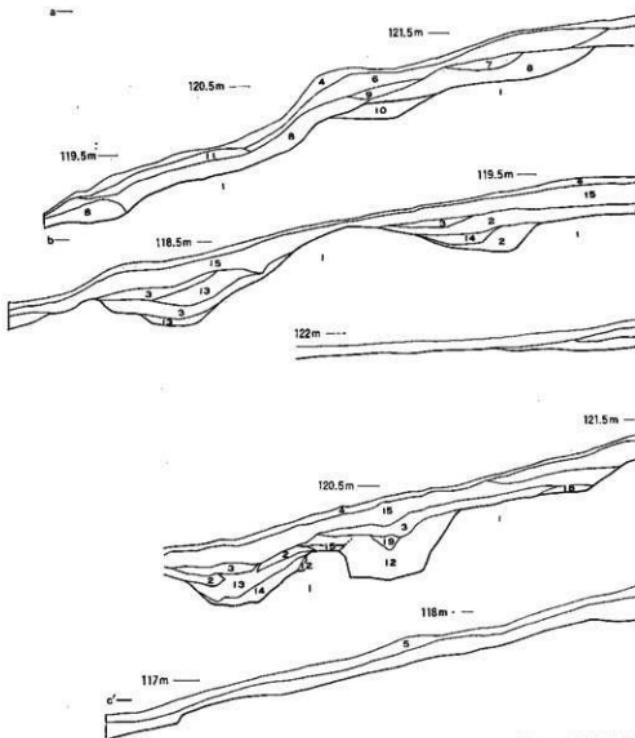


図23 丁野遺跡地層

考へざるをえない。よって、前項で述べた方形遺構は古墳発生前夜の墳墓の残存遺構とも推理できるのである。

M-1 B区からD区を経てC区西斜面に至るL字形に走る溝である。幅0.6m～0.8m・深さ0.5m前後を測るがC区では斜面にわずかな深さでしか遺存しなかった。D区では土壤蓄積基を意図的に切りこんだとも考えられる状態を示す。溝内堆積土たる黄褐色石灰質粘土層には弥生式土器及び古式土師器の破片が含まれていたが、その上層の黒色腐植土層上面には8世紀代の須恵器が乗っていた。この黒色腐植土はM-1上面に流入するとともに、CDE Fの境界点付近の凹所にまで広がり、埋没寸前の各遺構の上層に流れこんだものと考えられる。

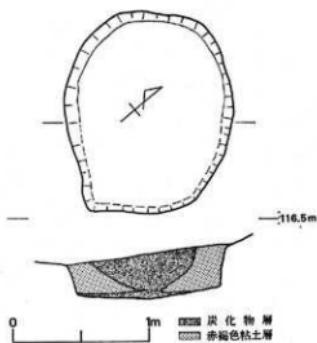
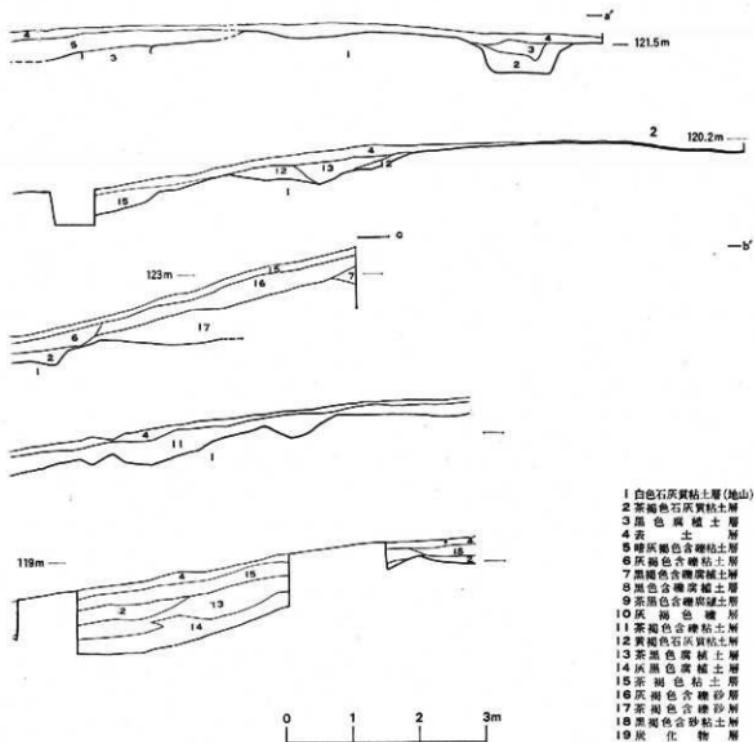


図22 丁野遺跡出土埴実測図



断面実測図(図14対照)

(4) 焼土壙 (図22)

1.2m×1.5m、深さ0.4mの橢円形を呈す。壙内には木炭が多量に包含されており、焼跡が赤く残っていることとあわせて、明らかに火を使ったことが想定されるが、壙内にはいかなる遺物も見なかつた。

(5) 製鉄炉 (図15)

D区東端に位置する径40cm・深さ20cmの小穴である。壙内には木炭層と茶褐色腐植土層が充填されていた。壁は焼け土と化し、堅くひきしまっていた。なお、壙内から鉄滓の付着もなまなましい鐵片と鉄滓が出土、ただちに製鉄炉と判断した。また附近の地肌も相当赤く焼けた個所が見られ、溶片の流れたことも考えられる。なお、M-1溝内やC・D・E・F区境界付近の黒色腐植土上面にも鉄滓が乗っており、この鉄滓も製鉄炉と同時期の遺物であると推定されるが、この腐植土層には鉄滓の他に須恵器も乗っており、奈良時代前葉の遺構と考えられた。

以上の各遺構の他にA区並びにC区の斜面には比高差40cm余の階段状掘こみが3段築成されており、土壙墓の墓域を区画する敷設とも予想したが、土壙墓C-5・C-6を削平しており、後代の掘こみと考えられた。

なお、今回の発掘区域の最北部に、丁野古墳群12号墳が所在するが、今回の調査では墳丘西側の一部を調査したが、その結果長さ4.5mに及び墓壙の一部と推定される黒色腐植土層帯を検出した。なお、墳丘西裾から弥生後期の土器2点を出土したが、これは土壙墓B1が11号墳下に存在することなどから、古墳造営以前の弥生時代の土壙墓に伴う遺物と考え、もう1点、西裾から出土した碎片を当古墳をはじめとする丁野岡山古墳群に伴う遺物と考え、11号墳は木棺直葬の6世紀代の古墳と推定した。

(別所 健二)

註

- ① 山頂や丘上に方形墳墓を築いている場合には、平地の方形周溝墓のように、整然と周溝に区画されていなくても、結果として方形プランになっているれば、名称はともかく、方形の埋葬施設の類例に合致していると考えてよいであろう。森浩一ほか『シンポジウム古墳時代の考古学』(学生社)における間瀬忠彦氏の発言は示唆に富んでいる。

3. 遺 物

(1) 弥生時代遺物 (図24)

弥生時代のものとしては、土器類及び石器がある。M1、M2、M3、古墳墳丘振部、土壙墓群の西側でC区の階段状斜面部等で出土しているが、これらの出土状態はいずれもプライマリーではない。ただM2内でピット内に埋置された壺だけが本来の状態を保持していたといえる。次に出土個所別に遺物について述べる。

M1(1・5・11) 1は外方に開いた頸部からほぼ水平に開き、屈曲させて端辺を立てた口縁部を持つ壺形土器。5もやはり壺形土器で、「く」の字形の頸部、直線的に外方へ開いた口縁部をもつ。頸部と口縁部との境界には明瞭な稜を持つ。11は高壺形土器で、太い筒部と大きく開いた短い脚鋲部を持つ。

M2(3・12) ピット内埋置土器の附近で壺形土器(3)がでている。口縁端部は欠失しているが、やや内湾気味の頸部を持ち、ゆるやかにカーブした下ぶくれの副部に移行している。副部はその下半部で最大径をとり、浅く凹む底部に移行する。器体外面は刷毛目調整を施すが、口頸部は縱方向、肩部附近は左下りの斜方向、胴下半部は横方向と順次方向を変えている。副部内面には輪積みの痕跡を残す。胎土には砂粒は少なく、焼き上りはもろい。

他に高壺形土器(12)がある。杯部と脚部との境界は「く」の字形によく絞り、3孔を穿つ大きく開いた脚部

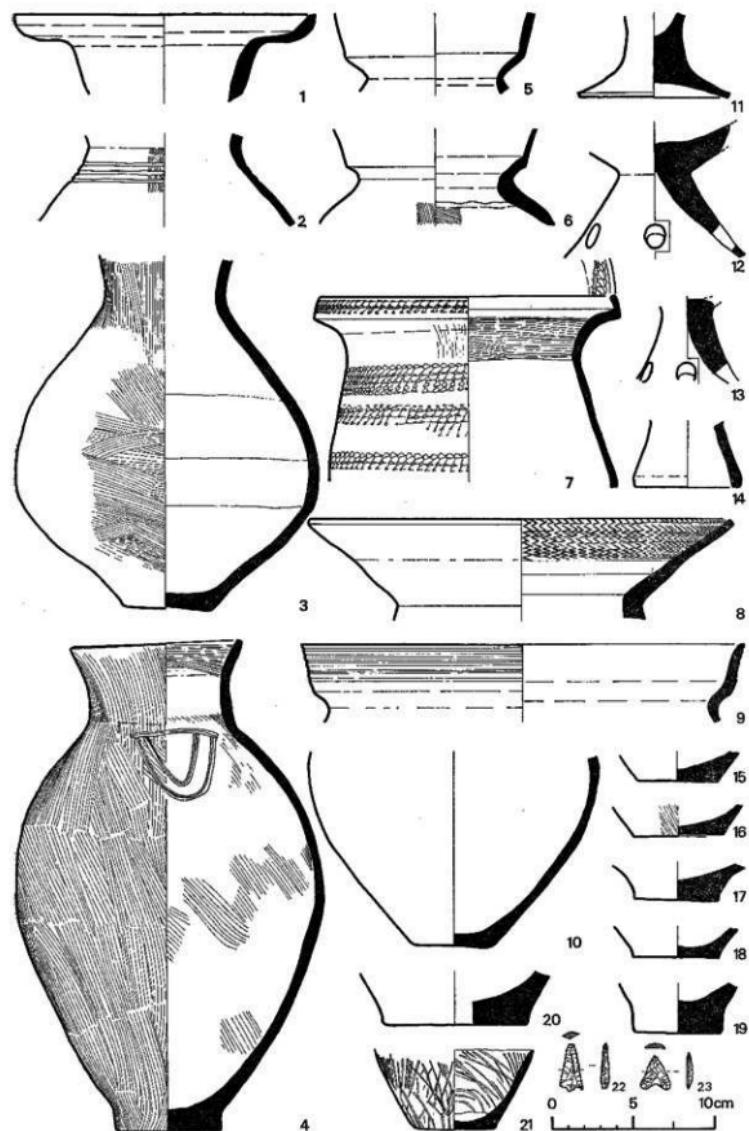


図24 丁野遺跡出土遺物実測図(1)

を持つ。器壁は厚い。

M 3 (10) 壺形土器の胴下半部。胴部はよく張り、底部は円底である。胴部の最大径は、遺存部からして、中程にくるものと思われる。調整法は明顯でないが、刷毛目を施す程度であろう。

古墳壙丘縁部 (4・7) この部分からは、比較的遺存状態の良好な壺 (4) と甕 (7) が出土している。4は内弯して開く短い口縁部を持つ。端部は平坦にしている。胴部はあまり張らず、細長い。底部は突出し、平底である。肩部に記号的文様を刻んでいる。器体外面全体を刷毛調整し、内面には、口縁部と胴部の三カ所に刷毛目の中跡を残している。胎土は細かく、黄褐色を呈していて、やや軟質であるが施上りは比較的良好。7は口縁部をゆるやかなカーブを描いて外反させ、端辺を弯曲させて内傾させている。胴部はほとんど張らず、口縁部径よりわずかに大きい程度。口縁部の立ち上り部分と胴部に、遺存部で三カ所に棒状工具による刺突文を施している。また口縁部の内面にも同様の施文を見る。

階段状斜面 (2・6・8・9・13~20) ほとんどすべて細片である。壺 (2・6)、甕 (9)、高杯 (13)、脚台部 (14)、底部 (15~21)、不明土器 (8) 等である。

2はゆるやかに、大きく開いた肩部に三条のヘラ描き沈線を施したもの。6は「く」の字形に屈曲した頸部と、棱をとって直線的に立ち上った口縁部を持つ。

9は頸部より屈曲して、やや開いた口縁部に6条の凹線を施したもの。

13は内窓氣味に開いた高杯の脚部で、3個の円孔を穿つ。

14は壺形土器の脚台部であろう。直線的で、開きは小さい。端部は平坦にしている。

15~20は壺あるいは甕の底部で、胴部と底部の区別のないもの (15・16・21) とやや突出気味にしているもの (17~20) とがある。16の外面には刷毛目痕を残す。また21には、内外面にヘラ状工具によるかき目が残る。

その他 (22・23) ともに打製の石器で、22是有茎、23は無茎。また、22は両面に打痕を認めるが、23は片面は刃部のみ打ち欠いている。

M2ピット 図25はピット内に埋置されていたものである。口縁部は体部に比べて短かく、直線的に外方へ開く。端部は平坦である。体部は中程で最大径をとり、全体に球形であるが、下端部で屈曲して直線的に底部に移行している。底部は突出し、平底であるが、体部に比べて小さく、不安定である。外面は全体を刷毛調整し、内面は粘土の接合部に刷毛目痕を残す。器高 40.5 cm、最大径 37.5 cm の大型品である。黄褐色を呈し、胎土に砂粒含む。比較的硬質に焼き上っている。

(2) 古墳時代遺物 (図 26)

古墳に伴うものとして諫の破片が1点出土している (13)。

(3) 奈良時代遺物 (図 26)

鐵鉄押跡に関連するものとして、フイゴ破片、釘、須恵器の出土を見た。

須恵器 杯蓋 (1~3) はいずれも口縁端部を下方に折り曲げ、天井部は水平で、全体に扁平である。3には中高の扁平なツマミが付く。1にもその痕跡を見る。

4、5は高台付碗形品。4は縁部を丸く仕上げた口縁部、5は断面長方形で、外方に踏んばった高台が付く。

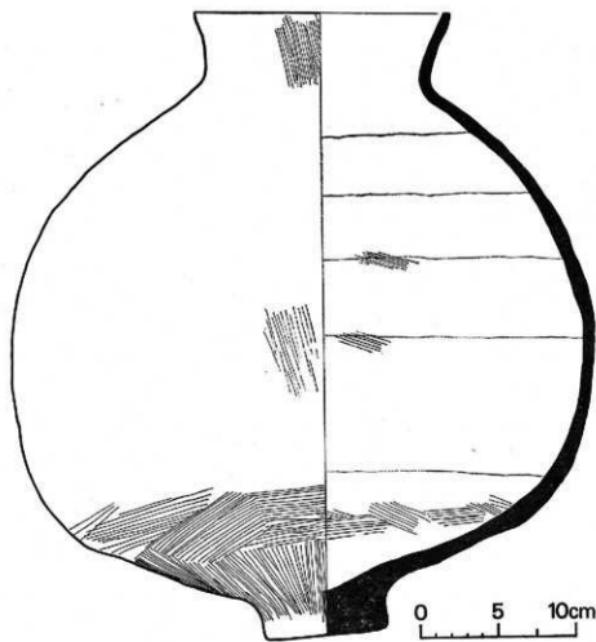


図25 丁野遺跡出土遺物実測図(2)

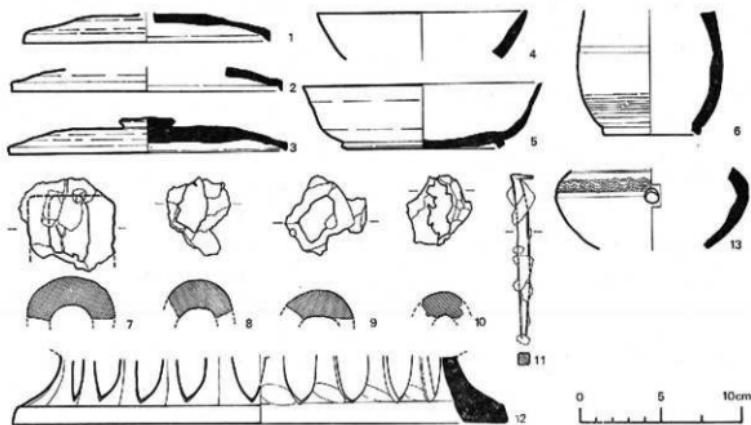


図26 丁野遺跡出土遺物実測図(3)

体部は、高台より外方にのびた底部より丸味を持って移行し、直線的に聞く。

6は小型の壺形土器で、高台を持つ。高台は断面三角形状で、外方に開く、胴部は高台部よりただちに立ち上がり、ほぼまっすぐにのびて肩部に至る。肩部中程に一条の凹線が施されている。

12は形状不明。断面三角形状の柱状部を貼り付け、透し文様をつけている。

フィゴ(7~10) 7は端部を残す。内径2.5cm、外径5.4cmを計る。他も同規模と思われる。石粒等の附着を見る。

町(11) 長さ10.5cmで断面はほぼ正方形、頭はたたいて扁平にし、折り曲げただけのもの。

以上の遺物のうち、古墳時代及び奈良時代のもの以外は土壙墓及び方形周溝に伴うものと思われる。そこで、これらの年代について若干を記す。

まず、出土状態について、古墳墳丘裾部より出土の壺形土器(4)と壺形土器(7)とは、その遺存状態が比較的良好であること、相接して出土したこと等からして、ほぼ同一時期のものとできよう。

次に、ピット内埋置の壺形土器(図25)とそれより1m足らず離れてM2内より出土した壺形土器(3)とは、3がM2の底面より若干浮いた状態で出土しているが、図25のものが、M2の掘穿後にピットを穿ち、土器を埋置したことから、両者はさほど時期的に離れたものではないと考えられる。

出土状態より考えられることは以上の事程度であり、切り合等より先後関係を考える資料を欠く。

土器を形態的にみるなら、まず箇刻線による記号的文様を持つ長胴の短頸壺形土器(図24-4)の類品は、湖西線関係遺跡・IVB区11号方形周溝墓出土の壺形土器に見られる。整形は刷毛目調整を基本とし、胴上半部にタキ目を施すもの、下部を籠ナデあるいは箇削りするものがあり、より丁寧な仕上げをしている。口縁外端面を軽く四線風におさえている点、単に平坦にしただけの当品とは異なる。また、記号的文様を持たないが、長胴の短頸壺は大阪府枚岡市西ノ辻D地点出土品中にもみられる。胴部最大径が上半部にあり、凹底を持ち、口縁端部は丸く仕上げている。前掲の湖西線関係遺跡・IVB区の11号方形周溝墓出土壺形土器は畿内V様式に位置づけられ、西ノ辻D地点出土土器はV様式の新しい段階におかれている。当遺跡出土のものは、これら両遺跡出土のものと比較して、西ノ辻D地点に下らないと考えられ、また11号方形周溝墓より新しい要素を持つものと思われる。

この短頸壺形土器に近似した時期のものとしては、図24-7の壺形土器であろう。長浜市鶴田遺跡や先述の11号方形周溝墓などからも類品が出土しているが、ともに刷毛目調整を加えた後に平行沈線と刺突文を配している。口縁部の形態に関していえば、東海地方の山中期の浅鉢型土器に多く見受けられ、施文に関しても、平行沈線と列点文をめぐらすことが一般的とされる。また、同様の口縁形態、施文を見る壺形土器で、脚台をつけた例が愛知県一宮市南木戸遺跡にもみられる。これら類例は、湖西線の11号方形周溝墓が畿内V様式に比定されている他は、いずれもV様式前半にある。当品の場合、施文に刺突文のみを用い、その多用とやや粗雑な様子は、やはり、これら類例より下るものと思われる。

これら2点は、先述の出土状態から考えても、時期的に近似したものと思われ、ともに後期中葉程におけるものである。

これらより時期の下降するものとしては大型で短頸の壺形土器(図25)であろう。簡単に「く」の字形の短い口縁部と球体の胴部、突出した底部、それに刷毛目調整のみで無文である点、多くの弥生時代終末期の形態的要

素を持つといえよう。この壺形土器はピット内に埋置されていたものであるが、これに隣接して出土した壺形土器(図24-3)についてみても、器体外面に肩毛目調整を施すのみで、無文であり、やはり近時のものと考えてよからう。M1出土の壺形土器(図24-10)も無文のもので、焼成もよく似ており、あるいは、これらのものと近時のものであろうか。

その他のものについては、細片で明瞭でないが、図24-9の壺形土器は口縁部外面に6条の平行沈線を施したもので、北陸地方の月影式土器に特徴的であり、M1及び階段状斜面出土の壺形土器(5・6)等は、いわゆる古式土師器の段階のものであろう。また、小片ではあるが、横描の平行沈線と波状文を組み合わせた施文のあるものがあり、一部弥生時代中期にさかのぼる可能性もある。

以上、土器形態よりして、弥生時代後期を中心として、一部古式土師器の段階まで考えられ、土墳墓群、方形遺構の年代も、この間にに入るものと考える。

(田中 勝弘)

4. 考 察

丁野遺跡の土墳墓群は、一般に弥生時代の墓地が集落跡に近接した平地に存在する例が概して多いのに反し、標高120m余の尾根上に位置し、古来我が國に受けつがれていた他界観念の一端として、つとに知られた山上他界観念の時代的淵源を秘める資料として、あるいは、葬制上における弥生時代の共同体員と支配者層の階級的差異の希薄性を物語る一事例として、興味ある考察の対象ではあるが、これらに関しては今はさてしばらく指き、とにかくも今回検出された遺構に密着して、これらの土墳墓群を形成した古代農業共同体の葬制単位の復原にまずは努めてみることにしよう。

遺構で述べたごとく、当遺跡の土墳墓34基中には、数块をもって群として把握できるものが存在する。これらの中で、第1群(D-1・D-2・D-3)、第4群(C-7・C-8)、第5群(C-5・C-6)、第6群(E-3~E-8)、第7群(F-3・F-4)の5群は一見して、群として把握することが可能な土墳群である。これらの土墳群はいずれも2基単位の群構成を有すと推量されるが、第1群の場合は当初2基であったが、後でD-1がD-2を切って掘込まれたと想定され、第6群の場合は土墳墓の主軸方向と規模の大小から2基単位ずつの計3小群(E-3とE-5・E-4とE-6・E-7とE-8)を抽出することができる。この2基を単位とする土墳群が生前において一家族を構成したであろうことは容易に推測され、当遺跡の土墳墓は家族墓として、ある一定の墓域の中に築造されているらしいことが判明した。ただ規模の大小の差が存する2基の土墳墓のうち、大型の土墳墓が家長の墳墓と考えられるのに対して、小型の土墳墓が妻のものか子息のものであるのかを判定する資料は皆無であるが、いずれにしても土墳墓の規模の差は生前における被葬者の家族内における位置の相異を示唆するものと思考できる。

以上の結果から、5群の土墳墓群のみでも7家族が数えられるが、この他に単独の土墳墓を運営した数家族、さらに発掘区東方及び円墳下にも遺構の存在が予想されることから、丁野遺跡は20家族に近い古代集落の共同墓地であり、その葬制単位はそれぞれの古代家族であったものと解釈されるのである。

次に本遺跡のいくつかの土墳墓に置かれたと想定される木棺について若干の考察を加えてみよう。弥生時代の木棺に関しては、従来近畿では実例に乏しく、推論の域を出なかったが、兵庫県田能遺跡^⑨・大阪府勝部遺跡^⑩の調査に際して豊富な木棺資料がえられ、近畿においても、九州地方同様の組合式箱型木棺の使用が確実に弥生時代

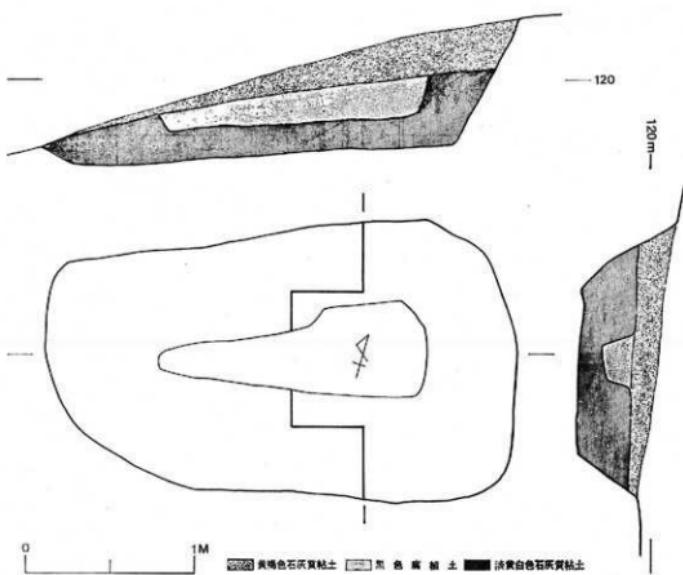


図27 丁野遺跡C区土壙墓（C-6）木棺跡実測図

中期まできかのぼれることが明らかになったと言える。ところで、前掲田能遺跡の調査者村川行弘氏は田能遺跡出土の木蓋土壙墓及び組合式箱型木棺墓を計6型式に分類され、また荻田昭次氏も勝部遺跡の木棺を2種の組合式箱型木棺^⑩と区別されている。

上記の研究に基づいて丁野遺跡の木棺の実態を推測してみると、最小限2種類の木棺を想定することができる。一つは、土壙墓C-5とF-2に設けられた木棺で、土壙墓の壇底両端の掘込みに小口板を嵌め込み、左右の側板を両端の小口板にもたせかけた略式の組合式箱型木棺で、恐らく土圧を少なくするため、土壙の壁に沿って、いっぱいに置かれたものである。今一つは、壇底に木棺を敷設したと判断されるなんらの構築も見られないにもかかわらず、木棺落込み痕が検出されたC-6土壙墓・D-7土壙墓・E-6土壙墓等に置かれたと予想しうる木棺で、この種の木棺は壇底に小口板を挿嵌する必要もない完全な組合式木棺で、勝部遺跡で発存していた組合式箱型木棺と同タイプのものと想像される。つまり、比較的規模の大きい墓壇内中央に底板から小口板、側板に至るまでのすべての部分を嵌め込んだ完全な組合式箱型木棺を据えたものである。

以上の弥生時代後期の土壙墓という埋葬遺構とは別種の埋葬遺構と考えられるものに、方形遺構が存する。この遺構は既述したごとく、主体部・封土を欠き推測の域を出ないが、築造法や周辺の遺構との関係、供獻土器の存在等から、都月2号墳の発見以来、岡山県を中心として、福井県原目山・王山・長泉寺等の遺跡でも発見された方形台状墓と呼ばれる山頂墳丘墓と考えられるものであり、「当初から新しい政治的・宗教的なモニュメントとして企画・創出された」大和朝廷の政治的諸関係の成立と軌を一にする畿内型のいわゆる前期古墳、古式古墳と異質な、弥生時代以来それぞれの地方で自生した発生期の古墳である^⑪。

このような小墳丘墓が当地方においても自生的に成立する基盤として、弥生時代末期より古墳時代初頭にかけて山陰・北陸地方に盛行する四線文系土器が、長浜市鴨田遺跡^①・湖北町今西遺跡^②・高月町大海道遺跡^③・新旭町堀川遺跡^④の各遺跡で出土しており、滋賀県北部と北陸との間に弥生時代末～古墳時代初頭の時期においても、密接な交渉が持たれていたことが取り上げられる。そしてこれらの恒常的な文化交流の中から、近江にも都月2号墳型の発生期古墳が誕生する母胎たる、文化・社会状況が醸成されていたとしても不思議ではない。

ところで、このような古墳時代開始前の文化的・社会的様相は湖西においても考えられており、高島郡新旭町に所在する各古墳の中にも、この発生期古墳が探し求められているのである。なお、丁野遺跡においても1点ではあるが、上述した四線文系土器が出土していることを記しておきたい。

2時期の埋葬遺構とは異質な生産遺跡として、当遺跡において製鉄炉が検出された。これは径40cm余の小規模な短期間の炉であるが、発掘区東方に平坦地が広がっており、工房跡の遺存も可能性なしとはしない。

近江における鉄生産に関しては、統日本紀に三回にわたって記録されているが、中でも天平宝字六年(762年)二月の条、「甲戌、膳=大衛藤原忠美朝臣押勝近江国浅井高島二郡鉄穴一處。」は近江、特に高島・浅井両郡における鉄生産の実態を裏書きする重要な資料である。そして、この記事を実証するように、湖西高島郡には木津製鉄遺跡^⑤・北牧野製鉄遺跡^⑥などが発見されていて、この地方の鉄生産が奈良時代に確実に存したことを窺わせる。

これに対して、対岸湖北周辺においても、先に掲載した文献から少なくとも奈良時代後葉にまで鉄生産の事実がさかのばると解釈されていたが、今回当遺跡で検出された製鉄炉は、先の文献に見合うような恒常的な生産遺跡ではないが、少なくとも奈良時代前葉に製鉄技術を修得した工人の存在を証明しうることはできるであろう。しかも湖北地方においては、「本貫地やその周辺の鉱山を採掘して繁榮した」と言われ、帰化人や新羅系の技術を駆使した、鉄生産に関わる氏族として広く湖北一帯に勢力を伸ばしたと考えられる息長氏が坂田郡南部に占していたと判断され、また採鉱冶金に少なからぬ関係を有した安曇系海人族の所住が伊香郡高月町阿閉周辺に想像されるなど、当地方の古代における鉄生産の盛行が少なくとも、奈良時代以前に溯源できることが予想されるが、その具体的資料として東浅井郡浅井町木尾城山古墳石室から鉄滓の出土を見ていることが取上げられるであろう。

以上、丁野遺跡において検出された計34基の土墳墓は弥生時代の後期の墓地遺跡として、中期の大津・南滋賀遺跡、後期の長浜・大東遺跡等の方形周溝墓や土壙墓とともに、滋賀県下の弥生時代の墓地遺跡の解明に重要な資料を提供したと言えるし、また方形遺構は、湖国における弥生時代終末から古墳時代初頭にかけての埋葬概念の展開・発展に大きな影響を与えないとも限らないであろう。

(別所 錦二)

註

- ①『田能遺跡概報』(尼崎市教育委員会、1967年)。
- ②『勝部遺跡』(豊中市教育委員会)。
- ③ 村川行弘『田能』(学生社、1967年)。
- ④ 注③と同じ。
- ⑤ 甘粕 健「古墳の形成と技術の発達」(岩波講座『日本歴史』1、1975年)。
- ⑥ 泰成秀爾「発生期古墳の地域相」(『歴史教育』第15巻3号、1967年)。
- 下津谷達男「方形周溝墓とその提起する諸問題」(『歴史教育』第15巻3号、1967年)。
- 内藤 見「弥生時代末期の墓制」(『日本史研究』第91号、1967年)。
- ⑦『国道8号線長浜バイパス開通遺跡調査報告書』Ⅱ、(滋賀県教育委員会、1973年)。

- ⑩『滋賀県湖北町今西遺跡発掘調査報告書』(湖北町教育委員会、1974年)。
- ⑪『ほ場整備事業関係遺跡調査報告』(滋賀県教育委員会、1975年)。
- ⑫『滋賀県文化財調査報告書』第5冊(滋賀県教育委員会・財團法人滋賀県文化財保護協会、1975年)。
- ⑬『美園遺跡発掘調査報告』(滋賀県教育委員会・財團法人滋賀県文化財保護協会、1975年)。
- ⑭『続日本紀』(新訂増補国史大系 第1部3、1962年)。
- ⑮『国道161号線・高島ハイバス道路分布調査概要報告書』(滋賀県教育委員会、1971年)。
- ⑯森 浩一「滋賀県北牧野製鉄道路調査報告」(『若狭・近江・讚岐・阿波における古代生産遺跡の調査』同志社大学文学部考古学調査報告 第4冊、同志社大学文学部文学科、1971年)。
- ⑰黒沢幸三「古代息長氏の系譜と伝承」(『文学』1965年)。



1 四郷崎古墳遠景(北から)



2 四郷崎古墳近景(南から)



1 主体部調査途中



2 表土除去後の墳丘。



1 石室全景(北から)



2 羨道開口部(西から)



1 石室（南から）



2 石室（東から）



1 玄室 右側壁



2 玄室 左側壁



1 玄室 奥壁（南半部）



2 玄室 奥壁（北半部）



1 玄室 西南隅



2 玄室 東南隅



1 玄室 北東隅



2 玄室 左袖部



1 玄室内 遺物出土状態



2 玄室内 人骨出土状態



1 玄室 左袖部 須恵器類出土状態(上部)



2 玄室 左袖部 須恵器類出土状態(下部)



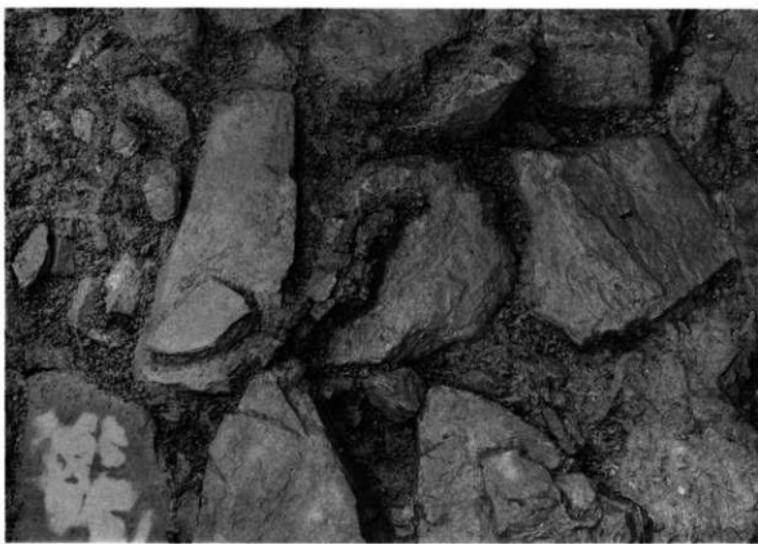
1 玄室 左袖部 須恵器出土状態



2 玄室 中央部 須恵器出土状態

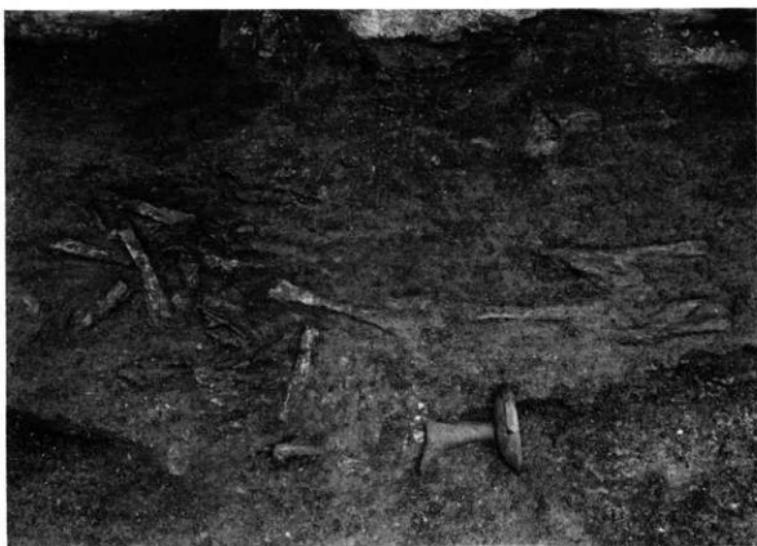


1 玄室床面 鉄鎌、管玉出土状態



2 玄室床面 鉄鎌出土状態

圖版一三 人骨出土狀態



1 玄室内 人骨出土狀態



2 玄室内 人骨、鐵鎚出土狀態

圖版一四 遺物出土狀態



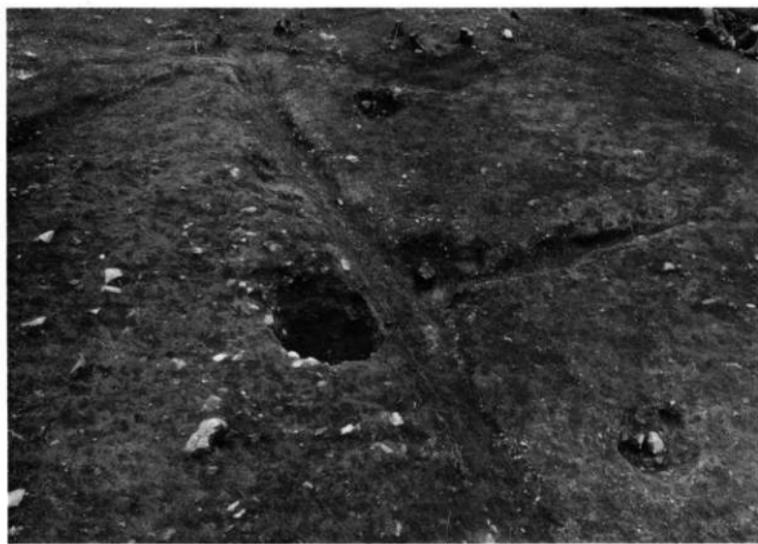
1 前庭部 高杯出土狀態



2 封土内 土師器高杯出土狀態



1 封土除去後の地山上の遺構(西から)



2 封土除去後の地山上の遺構(東から)

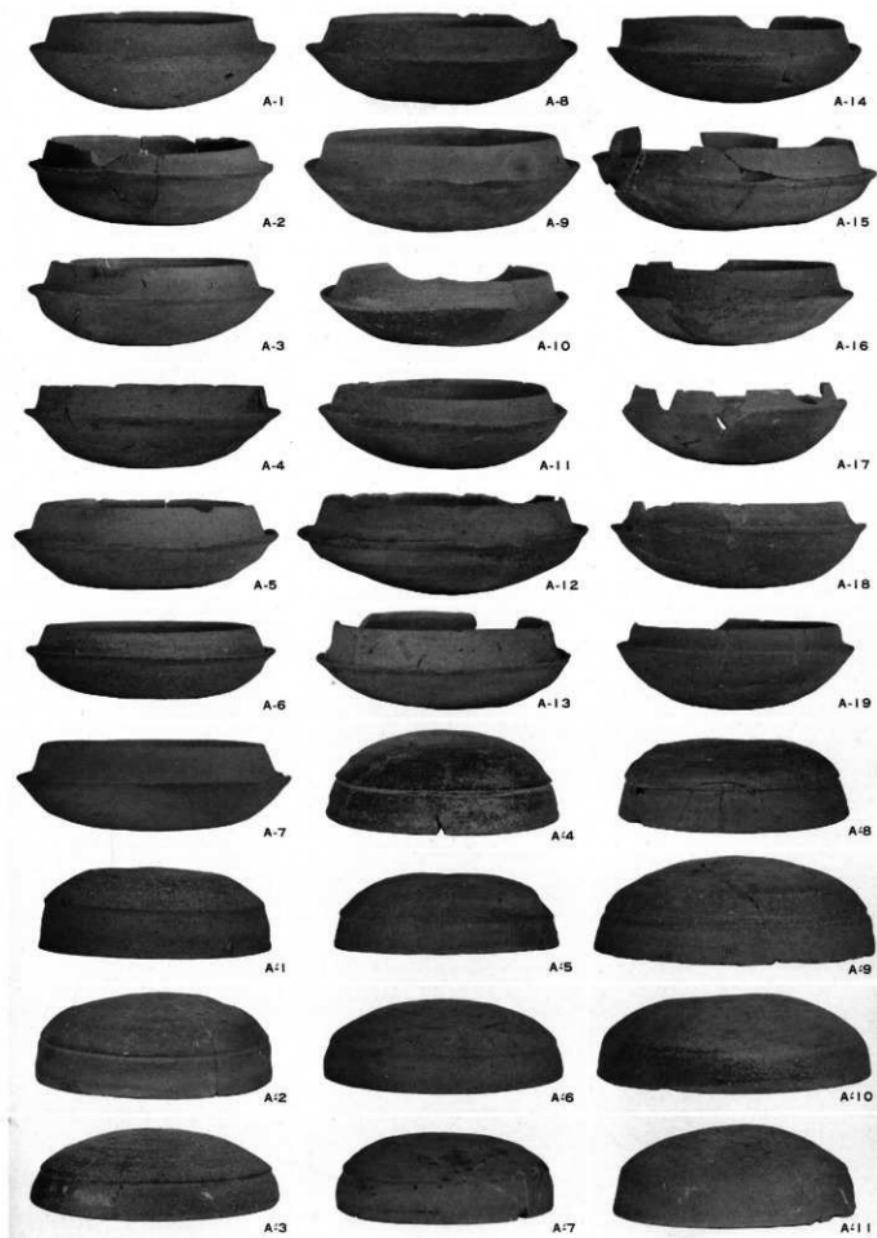


1 封土除去後の地山(墳丘東南部)



2 封土断面

圖版一七 遺物



四鄉崎古墳出土遺物 (1)

圖版一八 遺物



A-12



A-15



A-17



A-13



A-16



A-18



A-14



B-1



B-5



B-2



B-3



B-4



E-1



E-2



D-1



C-1



G-1



F-1



F-2



F-3



5



1



3



2



7

四鄉嶺古墳出土遺物 (3)



5

6

7



42



43



47



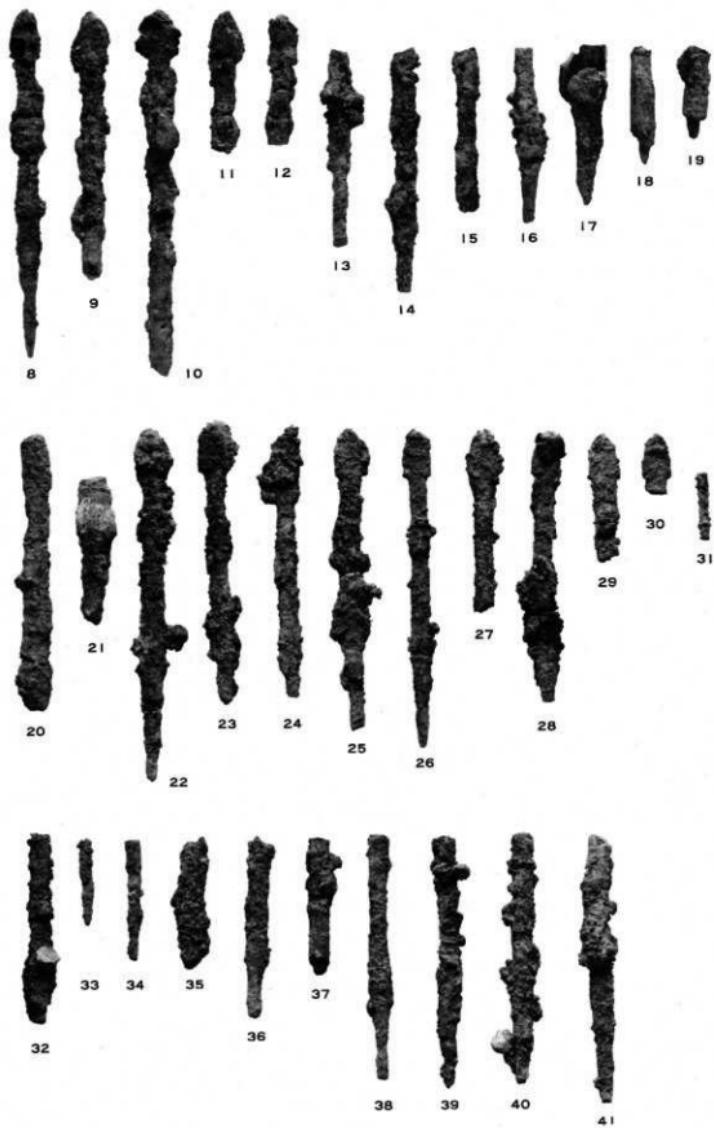
44



45



46



四郷崎古墳出土遺物 (5)



1 丁野山遠景(四郷崎遺跡から)



2 丁野遺跡近景(南から)



1 M1, M2他遺構検出状況(南から)



2 遺構全景(北から)



1 遺構 全景(南から)



2 C区遺構全景(北から)



1 E区遺構全景(南から)



2 F区遺構全景(南から)



1 方形遺構及び周辺遺構(南から)



2 土壇墓C7・C8近景(北から)



1 製鉄炉とD区土壙墓(南から)



2 土壙墓F-2近景(西から)



1 土壌墓C-6木棺落ち込み痕(東から)



2 製鉄炉近景



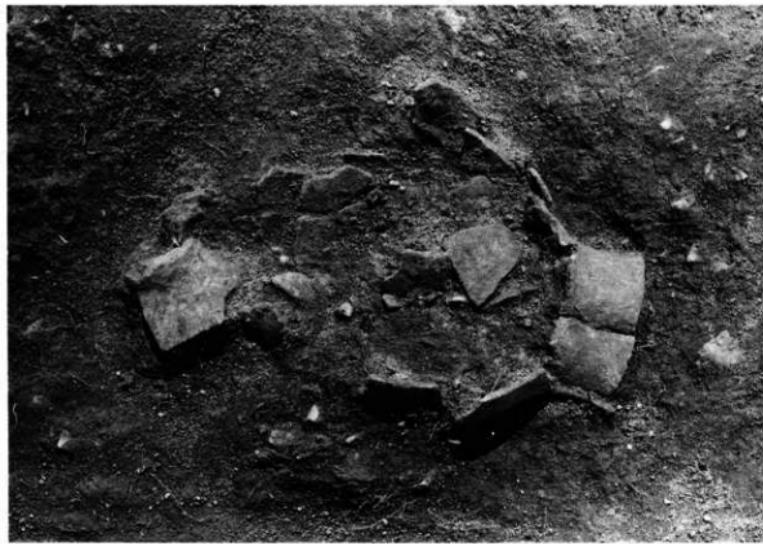
1 燒土塊檢出狀況



2 M2內土器出土狀況



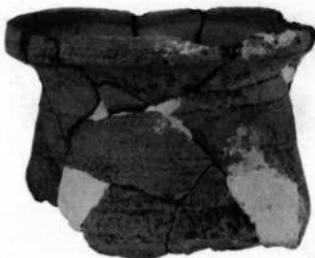
1 土壙墓C-7、C-8とM2(南から)



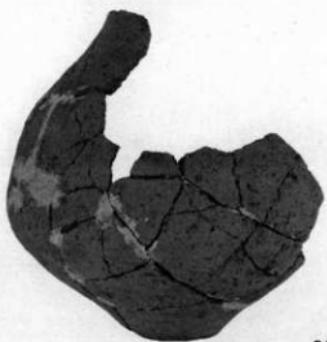
2 円墳裾部土器出土状況



24-10



25-7



24-3



25-4

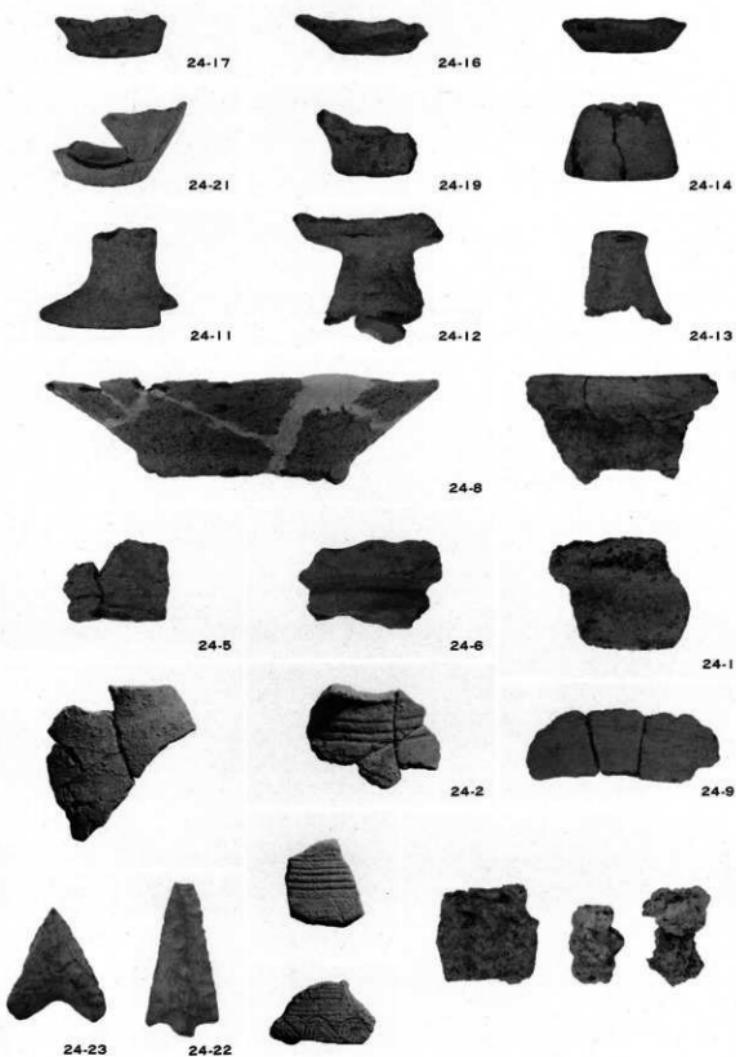


25



25-2

丁野遺跡出土遺物(1)(番号は挿図番号と同じ)



丁野遺跡出土造物2(番号は挿図番号と同じ)

図版三三造物



26-7~10



26-7~10



26-3



26-1



26-2



26-12



26-5



26-6



26-13



26-11

丁野遺跡出土遺物(3)(番号は挿図番号に同じ)

1976
昭和51年3月5日 印刷
昭和51年3月10日 発行

北陸自動車道関連遺跡発掘調査報告 II

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会
財団法人 滋賀県文化財保護協会

印刷製本 有限会社 真陽社
京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL 351-6034番